

ハーディ研究

日本ハーディ協会会報 No. 50

The Journal of the Thomas Hardy Society of Japan

50

特別寄稿論文

ウィリアム・モ里斯とトマス・ハーディ

—古建築物保護協会への関与をめぐって

川端康雄 1

特別寄稿エッセイ

「全体」へのまなざしの意味

—『トマス・ハーディ全集』全巻完結に寄せて

御輿哲也 27

論文

共感と契約

—*The Woodlanders* における進化のアイロニー—

福原俊平 33

Synopses of the Articles Written in Japanese

49

書評

Richard Franklin, *Thomas Hardy and Religion:*

Theological Themes in Tess of the d'Urbervilles and Jude the Obscure

粟野修司 53

日本ハーディ協会会則

61

二〇二四

日本ハーディ協会

2024

[特別寄稿論文]

ウィリアム・モ里斯とトマス・ハーディ —古建築物保護協会への関与をめぐって

川端 康雄

1. ハーディの同時代人としてのウィリアム・モ里斯

ウィリアム・モ里斯は1834年生まれなので、ハーディよりも6歳年長ということになる。そもそも二人は面識があったのかどうか。管見では会ったという記録は見当たらない。自伝 *The Life and Work of Thomas Hardy* の索引を当たってみると、William Morris の名が一か所だけ出ている。ハーディが50歳を迎えた頃、サヴィル・クラブに頻繁に通い、知人と食卓を囲んだ、そのなかに「ウィリアム・モ里斯の友人であるJ・H・ミドルトンがいた」(236)とある。⁽¹⁾ ケンブリッジ大学スレイド美術記念講座の教授であったミドルトンは確かにモ里斯の友人だった。そのあとミドルトンについて面白味のない人だという人物評が続くのだが、わざわざ「モ里斯の友人」とそこで断っているところを見ると、実際にモ里斯と面識があったとしたら自伝のなかで当然それに言及したであろうから、やはり会ってはいなかったということなのだろう。

ただし、同じ場にいたことはあったようだ。1876年、いわゆる「東方問題」が重大な局面を迎えていたとき、当時のディズレイリ保守党政権の親トルコ（オスマン帝国）政策に反対して、1876年12月8日にロンドン、ピカディリーのセント・ジェイムズ会館にて「国民会議」が開催された。ウェストミンスター公を議長とするこの大集会でモ里斯はグラッドストンらとともに壇上に上がっており、「東方問題協会」の財務委員に就任する。当日ここに集った文人、知識人として、トマス・カーライル、ジョン・ラスキン、ア

ントニー・トロロープ、チャールズ・ダーウィンらと並んで、ハーディの名前も入っている(Yildizeli 147)。会話は交わさなかつたにしても、このときにお互に姿を見ていた可能性はある。

今日モ里斯といえばもっぱら壁紙や織物のパターン・デザイナーとして一般に記憶されているが、生前は詩人という肩書で知られていた。もっといえば、出世作である『地上の楽園』の作者としてもっともよく知られていた。これはモ里斯の文学面での創作としては比較的早い時期の仕事で、刊行が1868年から1870年にかけて、モ里斯34歳から36歳の時期の作品だった。枠物語の形式でギリシア神話や北欧神話などの物語を韻文で語りなおしたこの作品が当時のミドルクラスの読者層に大いに受け、イギリス（および英語圏）でモ里斯は30代半ばにして著名な詩人のひとりとなる。ヴィクトリア朝の中後期においてはモ里斯といえば『『地上の楽園』の著者』という連想は、1891年に『ユートピアだより』を単行本として刊行したときに、やはりその肩書がタイトルページに附されていることからも伺える。

そういう次第で、モ里斯とハーディはとくに親交はなかったようだが、モ里斯のハーディ宛の手紙が残っている。ハマスマスのケルムスコット・ハウス（これはモ里斯が1878年から没するまで住んでいたロンドンの住居で、いまそこの地下および離れの建物がウィリアム・モ里斯協会の本拠地になっている）から発信された12月5日付の手紙である。年号が書いてないが、状況からいって1891年であると断定できる。これは同年に刊行された『テス』をハーディがモ里斯に贈呈して、それへの礼状だった。⁽²⁾ その手紙の全文は以下のとおり。

ご高著をご恵贈くださりありがとうございます。拝読できることを嬉しく存じます。貴殿の本は二冊、『はるか群衆を離れて』と『帰郷』を大いに楽しんで拝読しました。前者のほうがもっとも喜ばしく、それを貴殿はご自身の作品中でもっとも典型的な一作とみなしていらっしゃるものと存じます。ですが『帰郷』においても、舞台背景の美しさ（貴殿の場合それは当然のことですが）のほかにも、性質（つまり人間の性質ということですが）についてのおなじたぐいの精密な探求が大いに見られ

ます。(Morris, William, "Letter")⁽³⁾

物語中のウェセックス地方、『帰郷』でいえばエグトン・ヒースということになるが、モリスのコメントはその「舞台背景」を称えつつ、ユースティニアを始めとする主要登場人物たちの「人間性」の掘り下げ方を素晴らしいと称賛していると解せる。モリスとハーディのコミュニケーションを伝える現存する唯一の資料のなかで、このようにモリスが賛辞を述べているのは興味深い。

では『テス』を贈られたモリスはそれをどう読んだのか。モリス自身は何も書き残していないが、シドニー・コッカレル(1867–1962)が伝えているエピソードが残されている。

コッカレルについては、ケンブリッジのフィッツウィリアム博物館の館長(1908–37)であった時期にハーディと交際し、ハーディの「遺言執行者」(executor)となるなど、強い影響力をおよぼした人物として、私の見たかぎりではハーディ研究者のなかではむしろかなり悪名高いように見受けられる。⁽⁴⁾ 逆にモリスとの関わりで言うならむしろ大きな貢献者として肯定的に評価されている人物である。ブライ頓の生まれなのでハーディとおなじイングランド南部出身ということになるが、父親は石炭業者で、19歳ですでにラスキンやモリスと面識を得ている。1891年に古建築物保護協会（これについて後ほど細かく述べる）に入会したあと、その事務能力の高さを買われて、1892年にモリスの個人秘書になり、モリスの蔵書のカタログを作りをまかされた。さらに1894年にはハリディ・スパーリングの後を継いでケルムスコット・プレス（1891年発足）の秘書となる。モリスが1896年10月に死去したあと、ケルムスコット・プレスは予定していた本の印刷を続け、その最後の刊本としてコッカレルの編集になる『ケルムスコット・プレス設立趣意書』を1898年に刊行して印刷工房を閉じる。その最後の本に収録された「ケルムスコット・プレス小史」およびケルムスコット刊本の解題入りリストはこの方面での基本資料として大変貴重なものである。

モリスとラスキンの没後、コッカレルは彼らの名声を守る擁護者のような役割を果たした。活字媒体でふたりを誇るような記事を見かけると、すぐに反論の投書を寄せた。たとえばラスキンについて、彼は貴重な古書を自分の本棚に収まるように余白部分をナイフで切断したことがある、という話をある人が書いたところ、コッカレルは「けっしてラスキン氏はそのようなことはしなかった」と、猛然とそれに反論したのだった（このケースについては、ラスキンは本当にその手の行為に及んだらしいのだが）。

1955年にイギリスでウィリアム・モリス協会が創設されたとき、当然のことのように、コッカレルは初代会長になり（モリス没後ほぼ60年がたつていて、モリスに間近に接していた数少ない生存者だった）、1962年に95歳で大往生を遂げるまでその任にあった。

そういう次第で、モリス研究者の目から見ると、貢献者として肯定的にコッカレルを捉えることができる。もっと距離を置いて眺めると、かなり個的な人で、友情に篤い人であるのと同時に、ずいぶん敵も多かった人であったという印象を受ける。⁽⁵⁾

そして前述のハーディのモリスへの『テス』の贈呈については、ひとつコッカレルの証言が残されている。

コッカレルがマッケイルに語ったところによると、「イングランドにおける本当の暮らしを描きだした者はひとりもいない、とモリスがある講演で述べたことを受けて、トマス・ハーディは『ダーバヴィル家のテス』を彼に送った。するとモリスはそれを「陰鬱」だと思い、「好きになれなかった」。（Qtd. in Henderson 345）

マッケイルとは、画家バーン=ジョーンズの娘婿で古典学者、1899年にモリスのオフィシャル・バイオグラフィーを刊行したJ·W·マッケイル（1859–1945）のことで、その伝記執筆のために関係者から聞き取った証言のひとつがこれである。当然のことながら、関係者の多くが存命中なため公表するのは「差しさわり」がある多くの事柄と同様に、マッケイルはこれをモ

リス伝のなかで用いることはなかった。ロンドン、ウォルサムストウのウィリアム・モ里斯・ギャラリーが所蔵するマッケイル文書に含まれる聞き書きの資料に見られるもので、1977年刊行のフィリップ・ヘンダースンのモリス伝に引用された。

2. モリスによる SPAB 創設

ウィリアム・モリスは生涯の前半と後半で政治的なスタンスが異なっている。前半生は『地上の楽園』のプロローグの詩行にあるように、「空虚な時代の空虚な歌い手」(Collected Works, III, 1)を自認して、あえて政治的な言動を避けていたのであるが、ある時期に活発なアクティヴィストに変貌する。その変化のきっかけは「東方問題」に関わる反戦運動への参入で、1876年のことだった。そしてその翌年の1877年にモリスは古建築物保護協会を発足させる。

ヴィクトリア朝期において、古建築物、とりわけゴシック様式の教会建築を当初の「オリジナル」な状態に復元しようとする習わしが広くおこなわれた。その習わしは「修復」(restoration)という名で呼ばれた。ゴシック・リヴァイヴァルの興隆に伴うネオ・ゴシック様式の建築物の新築に加え、初期英國式への復元を推奨する教会建築学の組織ケンブリッジ・キャムデン協会(1939年創設)の影響もあり、古建築の「修復」が流行となった(Donovan 47-48)。そのなかでもっとも多くの「修復」を手がけたのがギルバート・スコットであった。彼ら「修復」建築家たちは、「当初」の様式への復元を第一義とするあまり、創建以来長い年月のあいだに増築されたり改築されたりした部分を余分な夾雜物として否定的に捉え、それらを除去することに抵抗がなかった。その復元の試みは多くの場合恣意的な改変となり、長い年月をへて刻まれてきた建物固有の歴史を損なうことになった。その点で言えば「修復」は「破壊」にほかならなかった。

すでにジョン・ラスキンがそうした「修復」に懸念を表明していたが、具体的に破壊の危機にある建物を明示して抗議の声をあげ、それを集団的な反

対運動として組織化した功績はモリスに帰せられる。当公の場で示されたという意味で最初の契機になったのがギルバート・スコットによるテューケスペリー・ミンスターの修復に反対して文芸週刊誌『アシニアム』1877年3月5日号に寄せた投書だった。その冒頭部分を引いておく。

いましがた、朝刊で「修復」という文字を目りました。ちゃんと読んでみると、今回は、事もあろうに、テューケスペリー・ミンスターがサー・ギルバート・スコットによって破壊される予定だとのこと。それを救うためになにかするにはまったくの手遅れなのでしょうか。この寺院のみならず、わが国は、^{いにしえ}古の建築物のおかげでかつて大いに名声を博していたのですが、こうした建物の遺跡のなかにかろうじてまだ残っている美しいもの、あるいは歴史的なものを、もはや救うことはできないのでしょうか。これらの遺跡の監視・保護を目的とする協会を一刻も早く発足させることは、一体、なにかの役には立たないでしょうか。こうした遺跡はいまでは数少なくなってしましましたが、それでも依然としてすばらしい宝なのであり、新たに生み出された方法で生きた歴史を学ぶことが私たちの多くにとって主要な喜びとなっているこの時代にあって、なおさらそれらは計り知れない貴重なものとなっているのです。(Kelvin, I, p. 351)

古建築物保護協会は1877年3月22日に正式に発足した。設立当初は56名の会員で構成された。発起人であるモリスは名誉事務局長に就任、モリスの友人のバーン=ジョーンズやフィリップ・ウェップらに加え、ラスキン、トマス・カーライル、レズリー・スティーヴンら文人、また6名の国会議員が含まれていた。この組織は頭文字を取っての SPAB という略称に加え、「アンティ・スクレイプ」(Anti Scrape)というあだ名でも呼ばれることになった。上記のように、修復建築家が「当初」の「理想的」な様式に復元しようとする際に彼らが夾雜物とみなした部分を削り取ってしまうことに対する抗議がその語（「削り取り反対」）には込められている。藤田治彦が指摘するように、SPABは「しばしば歴史的証拠——あるいは歴史そのもの——の破壊や捏造を伴う、歴史的建造物の大規模な修復を批判し、小規模な修理と日常の

メンテナンスの重要性を唱え、実行した。その意味で、古建築物保護運動は反修復運動なのである」(126)。創設以来 140 数年にわたって活動を持続させ、現在もロンドン、スピタルフィールズの本部を拠点として、英国の歴史的建造物、都市景観、自然環境の保全運動の中核として重要な役割を担い続けている。

3. ハーディと SPAB

ハーディが SPAB 入会したのは 1881 年、発足から 4 年後のことだった。建築についてのハーディの造詣の深さは言うまでもない。建築工事の実務ということであれば、モリスはエドマンド・ストリートの建築事務所に 1 年所属していただけだった。もちろんモリス・フォークナー・マーシャル商会を 1861 年に発足させて以来、室内装飾の仕事の関係で施工中の建物を見る機会は多くあったし、もとよりゴシック建築への知識は非常に深いものだった。しかしハーディの建築事務所と施工の現場での実地の経験とは大分中身が異なるものだったと言える。ドーチェスターのジョン・ヒックスのもとで、つぎにウェイマスの G・R・クリックメイ、さらにロンドンではアーサー・ブロムフィールド、T・ロジャー・スミスといった建築家のもとで働き、建築の仕事をライフワークにするか、あるいは作家稼業に進むかという二者択一が 30 歳を過ぎた時点であったわけで、その点がまずモリスと異なる。なにしろ自邸マックス・ゲイトを設計できる人だったわけで、モリスが 20 代半ばで結婚して新居として建てたケント州ベックスリー・ヒースの「レッド・ハウス」は、ストリート事務所の兄弟子だったフィリップ・ウェップが設計したのだった（その内装を集団的に手掛けたことがモリスのデザイナーとしてのキャリアを決定づけたわけだが）。

ハーディのキャリアは 1856 年に 16 歳で学業を終えてジョン・ヒックスのもとで建築家修行を始めてからなので、優に 15、6 年、建築の仕事に関わったことになる。そのなかで、仕事の主要部分がまさしく教会建築の修復関連の業務であり、⁽⁶⁾ モリスと SPAB の観点からすると「破壊行為」ともいえる

ような「工事」に関わってしまったということで、建築現場を離れて時間を経て過去を振り返ったときに、それをかなり反省するような気持が生じていたということ、それが SPAB 入会につながったと見てよいだろう。じっさい、自伝の 1860-61 年の記載のなかにこうある。

B [ヘンリー・ロバート・バーストウ、ジョン・ヒックスのもとでの徒弟仲間] が去ると、ハーディの任務は酷しさを増した。未熟さに鑑みて徒弟期間は一、二年延長されていたが、それにしても、これまで以上に建築の実務に専心する必要が生じていた。当時はドーセット州とその近隣州では、教会堂の「修復」が盛んに呼ばれており、若きハーディもそうした時流の変化をにらんで、古い教会堂を数多く査察、測量、スケッチするようになっていた。ジャコビアン〔17世紀初頭〕やジョージアン〔18~19世紀初め〕と並んで、大変美しい古いゴシックの建造物を破壊し、というか原型を留めぬほどの改変を加える——その、受身ながら手先となっていたのだ。これは後年、彼には一大痛恨事となった。
(Hardy, *The Life and Work* 35.『トマス・ハーディの生涯』32 頁。既訳を一部修正して使用、以下同様)

修復がピークを迎えていた時代にヒックスのもとで手掛けた工事を行き過ぎの破壊であったとしてそれに関与したことを「一大痛恨事」として反省しているくだりである。こうした「修復」への反省は他にも自伝中に散見される。たとえばセント・ジュリオット教会（ハーディにとっては妻となるエマと出会った場所であるという点でとりわけ思い出深い教会）に彼は 1867 年にヒックスの指示を受けて調査のため訪問したのだったが、その後ヒックスは急死し、1870 年にウェイマスのクリックメイが修复工事を受注した。ハーディはこう回想している。

[...] ピクチャレスクな放置状態のままの本来の聖ジュリオット教会堂を最後に彼〔ハーディ〕が目にしたのも、あの時〔1870 年〕であった。じきに土地の建築業者が手をつけて塔を、北側廊（これまででは身廊）を、そして翼廊を破壊しつくすのだ。ハーディは、教会の歴史のそんな抹消、また、その消滅に加担する自分を無念に思った。彼が初めて眺めたときの会堂こそ、彼の生涯のロマンティックなるものと結びついていたのに。

にもかかわらず彼の加担はやむをえざること、その区域を改変し小振りにする計画は彼の現場到着以前に決まっていたのだ。もしも残して使うとすれば、荒廃した建造物を前にしてどんな手があるか、というと難しい。旧来の身廊の古い壁はノルマン、否、さらに古い年代物で、あるいは保存すべきであったかもしれない。北の扉はどうやらサクソン風なのに粗忽にも破壊されていた。がハーディはそれを図面に取った。それは絶妙な彫刻入り座席端部などの消失した細部のスケッチと一緒に、現在の教会堂に保存されている。⁽⁷⁾さいわい、古い南側廊はアーケイドとともに無疵のまま。そして側廊はいまは身廊に当てられている。

この教会堂で、古くからの内陣仕切格子に対する施工業者の捉え方をめぐって、思わぬおかしな経験をした。ハーディはと言えば、その朽ちた狭間飾りや、支柱、塗金、等の入念な図面を描き、それぞれ当て木、削ぎ木すべき箇所には印をつけてあった。ある日建築現場に行ってみると、昔の仕切り格子の、こってりとニスを塗った紛い物がその位置におさまっている。びっくりした彼に、質問に答えて業者は宣った、「ああハーディさん、わしゃ勝手に腹を括ったんだ。これをやる以上は一ポンドや二ポンドこだわりやしない。あのつぎはぎだらけのおんぼろよりか、新しい格子を寄付しようと思ってね」(The Life and Work 82.『トマス・ハーディの生涯』83頁)

後段のエピソードは施工業者の古建築物への配慮の欠如というか無神経さを具体的に示していて、建築実務の経験を多く踏んだハーディならではの記述である(後述の「教会建築の思い出」はこうした要素を多く取り込んでいる)。建築親方の指示を受けての業務とはいえ、こうした破壊行為に加担してしまったことの反省と贖罪の気持ちがあつて、1881年という比較的早い時期にハーディはSPABの趣旨に賛同して会員となったのであろう。

SPABに加入したころ、ハーディは『熱のない人』を『ハーパーズ・ニュー・マンスリー・マガジン』に連載していた。興味深いことに、この小説の主人公ジョージ・サマセットは、これから自身の建築事務所を構えようとしている若い建築家で、ゴシック建築について深い知識を有している。中世ノルマン建築の城(あるいはカントリー・ハウス)であるド・スタンシーの所有者

となった鉄道王の娘ポーラ・パワーの依頼で10万ポンドの費用をかけた大がかりな修復仕事に誘われる。ただしその中世建築に、まったく異質なギリシア様式のクアドラングルを増築することを依頼される。この屋敷の修復には以前からハヴェルという年季の入った建築家がいるのだが、古建築の知識でこのハヴェルが若いサマセットと議論すると、ハヴェルはまったく歯が立たない、それで領主のポーラはサマセットのほうを信頼するのだった。サマセットは誠実にもコンペティションのかたちにすることをポーラに提案する。そういううちに、ある朝刊新聞にこの修復・増築計画を批判する匿名の投書が出される。

手紙は、表向き、ある私心のない人間によって、もっぱら芸術のためを思って書かれたとされていた。それはまず、最近の出来事に読者の注意を求める。ド・スタンシー家の古い興味深い城が、不幸にもある偶像破壊者の家系の人物の手に落ちたが、同人物はわが州の伝統を尊重することもなく、あるいは石造建築の歴史を思う何らの気持ちさえなく、あの古来の建造物の興味深いものすべてとは言わないまでも、その多くを取り壊し、そのど真ん中に、見るもおぞましいギリシア神殿らしき夾雜物を持ち込まんとしている。すべての中世芸術の愛好者の名において——とその実直なる筆者は懇願する——大内乱において傷つけられ撃ち叩かれた建物が、いま、一人の無責任な所有者の気紛れによって完全な廃墟に化せんとしているのを救うために、何らかの手が打たれんことを。(Hardy, A Laodicean, chap. 14.『熱のない人』110頁。引用はこの佐野訳を適宜修正して用いた)

修復工事を破壊行為とみなして、それに強く反対するこの批判・非難のトーンは、SPAB的であるし、先ほど見たモリスのテューカスベリー・ミンスター修復への反対の投書を想起させる。もっとも、この匿名の手紙は、所有者のポーラがサマセットを優遇したことで不利な立場に追い込まれたハヴィルが、状況を開拓しようとして密かに投函したものだということが後に判明する。「私心のない人間」でもなければ「実直なる筆者」でもなかった。したがって、この修復反対の投書をSPAB的な投書のパロディと取ることもでき

てしまうわけだが、その主張じたいは古建築についてのハーディの見解から外れたものではないと思われる。

SPAB 入会後ハーディが初めて関与した案件がワインボーン・ミンスターの修復計画だった。その塔の劣化を理由に修復の計画が出ていたという情報が 1880 年の暮れのうちに SPAB 本部に届いていた。当協会の書記長であった C・G・ヴィナルは会員のチャールズ・キーガン・ポール(ハーディの友人・出版者)の助言を受けて、このときワインボーンに住んでいたハーディにこの件で協力を仰いだ。それをハーディは快諾した。1881 年 10 月 20 日にハーディはヴィナル宛ててこう書いている。

その〔ワインボーン〕ミンスターの問題について私が〔古建築物保護〕協会に協力できることであれば何であれ喜んでいたします。しかしながら、ここでの私の影響力は無であることを附言しなければなりません。健康のために当面コテッジを借りており、ここ〔ワインボーン〕では私は一時的な住人に過ぎません。ですがおそらくここにこれから 6 か月から 9 か月いる予定です——その期間この場所の代表を務めることが貴委員会にとって有利であるというのであれば。[...] (Purdy & Millgate, I, 95)

SPAB が関与した修復反対運動は、思いどおりに建築を保護することができない場合も多くあったのだが、このケースは功を奏した。SPAB の第 5 回年次大会(1982 年)においてこの件が報告されている。

その地の連絡者からの要望で当協会の代表がワインボーン〔ミンスター〕を訪問し、中央の大きな塔の柱の状態(それは〔修復の〕失敗の兆候を示していた)について細かい報告をおこなった。当協会は工事を請け負っている建築家にこれ以上の失敗を防ぐ最善の方法について提言するリストを送った。彼は、非常に友好的な態度で当協会の計画を受け入れ、それを実行に移した。その結果、幸いなことに、目下のところさらなる損傷の兆候は見られない。(“Annual Report”)

ハーディが SPAB に関わった最初の案件がこれであった。以後彼は具体的にどのように SPAB に貢献したのだったか。これについてはクローディアス・

J・P・ビーティが『トマス・ハーディ——保存建築家』(1995) のなかで詳細に論じている。ビーティがまとめているのは以下の 16 棟の建物(ほとんどが教会建築)である。

1. ウインボーン、聖カスバーガ・ミンスター教会
2. ストラットン、聖メアリー教会
3. トッラー・ポーコラム、聖ピーター&聖アンドルー教会
4. イースト・ラルワース、聖アンドルー教会
5. メイドン・ニュートン、ホワイト・ホース・イン
6. ドーチェスター、フォーディントン、聖ジョージ教会
7. サウス・ペロット、聖メアリー教会
8. アボッツベリー、聖キャサリン教会
9. パドルタウン、聖メアリー教会
10. コンスタンティノープル、聖ソフィア教会〔ハギア・ソフィア〕
11. シモンズベリー、洗礼者聖ヨハネ教会
12. シャーボーン、聖母マリア教会
13. ストーク・ポージズ、聖ジャイルズ教会
14. ウィンターボーン・トムソン、聖アンドルー教会
15. ドーチェスター、オールド・グラマー・スクール
16. ドーチェスター、ハイ・ウェスト・ストリート、判事ジェフリーズの住居 (Beatty, *Conservation Architect* 1)

ひとつだけ海外の建築物(10 のハギア・ソフィアの修復計画への反対表明)があるが、あとはほとんどがドーセット州内の建物(ドーセット以外は 2 がコーンウォール、13 がバッキンガムシャー)である。モ里斯のように組織の中心となって率先して精力的に修復反対運動を担ったのではないけれども、若い頃から馴染んでいて愛着を覚えている故郷とその周辺の建物が修復建築家の手によって破壊の危機に瀕していると見るや、多くの場合当該の建物を訪れて状態を吟味し、SPAB 関係者と連絡を密にして古建築をできうるかぎり最善の状態で保存することに尽力した。ハーディの果たした仕事のなかでこの方面での貢献もあったことは記憶に留められるべきであろう。

4. 「教会修復の思い出」

ハーディが SPAB に入会してから 25 年後にあたる 1906 年、ハーディは同協会の年次大会での特別講演を依頼された。それで書いたのが「教会修復の思い出」である。ただし、自伝で述べているように、年次大会の当日（6月 20 日）、「やむを得ざる欠席のため、ユースタス・バルフォア大佐によって代読された」（*The Life and Work* 356; 『トマス・ハーディの生涯』376 頁）。もとより人前で話をするのを苦手としていたので、「やむを得ざる欠席」というのは言い訳めいている。大会で発表されたあと、この論考は SPAB の『議事録』および『コーンヒル・マガジン』（1906 年 8 月号）に掲載された。

前述のように、建築事務所への勤務時代、ハーディの業務の多くは当時流行していた「修復」工事に関わるものだった。SPAB の聴衆に向けて、青年期に務めとしておこなっていた破壊行為への贖罪行為の趣がある。⁽⁸⁾ 書き出しの部分を見ておこう。

ゴシック建築に興味をお持ちの多くの方は悲しく思い起こされるかも知れません。「修復」を望む声は、そう、75 年ほど前からさかんに言われ始めました。もし英國にある中世の建物がみなその時点で、そのままに放って置かれ、年月や風雨にさらされて、荒れ放題になっていたなら、今日もっと多くの建物が残っていたことでしょう。その間に何百万ポンドもの金を名ばかりの「保存」に使ってしまうよりは。

救済のもとにおこなわれた破壊はあまりにも甚だしいものだったので、その工事と一緒に古い建造物の全体や一部に防風、防水の処置が施されたのであっても、ほとんど無意味でした。その破壊がいかに甚大であったか、それは広い範囲にわたって教区から教区へと自分で行き、実在している教会を以前の姿や伝承また記憶とつきあわせてみないとほとんどわからないでしょう。（paras 1–2; 「教会修復の思い出」90 頁。引用は林訳を適宜修正して用いた。以下同様）

「75 年ほど前」、すなわち 1830 年頃から始まったゴシック建築への「修復熱」が取り返しのつかない害を為してしまったことをこのように述べたあと、教会建築に伴う困難の要因として、教会堂をじっさいに使用する聖職者や信

徒たちにとっての使用上の価値と、古事物研究家ほかの外部の人間にとっての芸術的価値という、相反する価値を持つ点に困難の大本があるとハーディは指摘する。「物質的」理由と「精神的」理由の両方のために、現代の技術をもってしても、それを修復してしまえば、もとの建築物にともなう「人間的連想」を消し去ることになるので、真の意味でオリジナルの再現は不可能である——こう主張する冒頭部分は十分にシリアルスな論調だといえる。

とはいって、この講演の全編がこのような調子ではない。その後に続く修復をめぐるさまざまな逸話は、内容そのものは修復をめぐる弊害や関係者の蒙昧の事例を語るものでありながらも、かなりユーモラスなもので、小説家ハーディらしい、聴衆の笑いを誘うような、サービス精神にあふれるものでさえある。そうした逸話を箇条書きにしてまとめるところである（段落分けは Beatty 編の本文による）。

- (1) 家族席の場所が変えられたことによる兄弟喧嘩。（para 9.）
- (2) 墓碑銘の入れ替え（喜劇役者夫婦と独身の牧師）。（para 10.）
- (3) 「修復」の施工者が「古い資材」を有料（廉価）で引き取れる契約に起因する破壊。（para 15.）
- (4) 17 世紀の（比較的新しい）様式だからという理由で施工者が機械的に取り外してしまい、その古材を施工者が私的に利用する。（para 16.）
- (5) ある一族が死に絶えたものと誤解してその納骨堂を廃材置き場にして遺族に抗議される。（para 17.）
- (6) 寄付者が施工者に修復箇所について全面的な取り換えを要求する。（para 18.）
- (7) 施工者が自身の確信のもとに自腹を切って古い窓や内陣仕切り（スクリーン）を紛い物に代える。（paras 19–20.）

上記の一部を紹介しよう。最初の(1)の逸話はこうだ。ある教会の家族席が修復工事によって堂内の別の場所に移されたため、父親の葬儀のために久し

ぶりに帰郷した二人の息子がその位置をめぐって口論していた。そこに通りかかった若きハーディが事情を推測して説明すると、兄弟は仲直りしたもの、「こんなインチキをされて、二度とこんなおんぼろの教会に来るもんか」と捨て台詞を吐いて去っていったのだという。また、(2)の逸話は、ある教会の内陣の一角に名高い役者とその妻の墓があり、別の一角に自身を貫いて亡くなった牧師の墓があったのだが、修復工事の際にそれぞれの墓碑銘を刻んだ石板が間違って入れ替わってしまった。「もし墓の発掘がなされたら、発掘者は自身の聖職者の傍らに女性を見出し、また役者の傍らに妻がないのに驚くことでしょう。まあこの役者は喜劇俳優でしたので、このことを知つて面白がるかもしれません、牧師はまた別の気持ちを抱かれるでしょう。」

ちなみに後者の逸話については 1880 年代初めにハーディが書いた「平たくされた教会墓地」("The Levelled Churchyard") と題する 6 連からなる 4 行詩で同じ着想が用いられている。修復工事のために教会墓地の墓石が引き倒され入れ替えられてしまったことをそこに眠る死者が通りすがりの人になんとかしてほしいと嘆願する趣向の詩篇である。墓石が無分別に移し替えられたあげく、本来善人の墓に付いていた聖句が悪人の墓に行ってしまい、禁酒主義者であった故人を称える聖句が大酒飲みの墓に付けられてしまった、と窮状を訴えるのである。その最後の連は「汝の教会堂の修復から、／汝の草地の整地から、／熱意ある教会人らの鶴嘴と鉋から、／おお、主よ、なにとぞわれらを救いたまえ！」とあり、ここでも「修復」のもたらす弊害への抗議がユーモアを交えて表わされている。この詩篇や「教会修復の思い出」のユーモラスなタッチは、モリスによる SPAB 関連の一連の抗議文や講演ではほとんど見られないぐらいのものだ。

そのようなトーンの異なるテクストでありながら、ハーディとモリス双方の「修復」批判のポイントは共有されている。たとえば「教会修復の思い出」のなかで、「ある教会が二つ三つの様式を示している際に、ひとつの様式以外の他のものをすべて取り除き、新しくすべてをそのひとつの様式で置き換えることによって統一してしまうことがありました。そのような破壊行

為をいま詳しく述べる必要がありますまい」(para 8) というくだりは、モリスが 1877 年の講演「小さな芸術」のなかでの、建物の単なる修繕でなく、ある理想的な完全な状態への「修復」を図ることを「不可能であるのと同時に建築物には破壊的な所業」('小さな芸術' 33 頁) として非難する論点と重なり合う。

そしてハーディは「思い出」のなかで、先程紹介したような喜劇的な(内実は深刻でもある)逸話を多く並べて修復の弊害を十分に語ったあと、歴史的建造物の「物質的」な特質と「精神的」な特質について述べる。前者の「物質的」特質については過去の建築物は唯一無二なものであって、そもそも同一のものを現代に作るのは不可能であること。さらに二つ目の精神的な特質のほうがより重要であるとする。それは美的なものとは関係がないことで、「人間の連想作用」によるものだとする。

この連想からくる感情が蒙った置換や連續性の断絶による痛みそのものが、主にこの国が受けた 70 年にわたる悲劇的で、嘆かわしい教会復興による巨大な損失を表わしているものと私は思うのです。古い建築物を新しい材質で作り変えるのを防ぐことは、美的というよりはむしろ社会的な——私に言わせれば人道的な——義務なのです。それは思い出、歴史、同胞愛、兄弟愛を護ることなのです (It is the preservation of memories, history, fellowships, fraternities)。つまりところ、人生は芸術よりも大事なものであり、ときには不格好に見えるある建物の外観も、行く世代の人々が眺め入場したことのほうが、建築上の微妙な良否よりもはるかに重要なのです。(para 31)

モリスであれば、「美的 (aesthetic)」な義務と「社会的 (social)」、「人道的 (humane)」な義務とをこのように二項対立的には表現せず、両者を統合する見方を出すのかもしれないが、古建築物を保護することは「思い出、歴史、同胞愛、兄弟愛を護ること」だとするハーディの主張は、モリス自身の発言であったとしてもおかしくない。なかでも「同胞愛」(fellowships) の語はモリスが物語『ジョン・ボールの夢』(1886 年) などで特別な感情を込めて用

いたキーワードなのだった。

モリスは、「いったん失われればいかなる壯麗な現代芸術によっても取り返しのきかない価値ある（そして国民的な）記念碑〔的な古建築物〕を無謀に扱うことは、〈国家〉に対してもきわめて残念な行為に加担することです」（『小さな芸術』33）と警告した。ハーディは「教会修復の思い出」の結びで、皮肉なことに修復建築家のみならず聖職者や教区民が「無関心」であったがためにわずかながら古い教会が損なわれずに残されたことを指摘してこう述べる。

「堂々たる無為」の方針が——これは往々にしてもっとも偉大なる方針なのですが——歴史的な建物をただ放っておいたこれらの人びとによつて、これほど有益に実行されたことはありません。わずかな知識に基づいて行動することが危険であるときに、なにもしないことは最善を尽くすことなのです。（para 39）

修復建築家たちは過剰な自信をもって過去の記念碑的建築物を理想的な形態に復元できると思い込み、多くの古建築物を破壊してしまった。そして多くの教会関係者、施工者、寄付者、一般信徒は修復理念に賛同、あるいは無批判に追随することで破壊に加担してしまった。そうしたなかでハーディは「堂々たる無為」（masterly inaction）——つまり敢えて建築に手を加えず泰然としていること——の有用性を説いて講演を結んでいるのである。モリスが現在の自分たちを過去の建築物の所有者と見るのでなく、極力損なわず子孫に引き渡すために一時的に預かっている「管財人」として捉えるべきだとする主張とこれは響き合うものだと言えるだろう。

5. メイ・モリスとハーディ

冒頭で述べたように、ハーディとモリスの直接のやり取りを伝える文書は1891年に『テス』を贈呈されたモリスの礼状一通のみであった。ただし、モリスが1896年に没したあと、モリスの次女のメイ・モリスがハーディと

手紙のやり取りをしていて、それが残されている。メイは父モリスの生前から刺繡のデザイナー兼実作者として活躍しており、父親の政治的コミットメントにも共感し、社会主義運動にも行動を共にした。従来著名な父親の陰に隠れて目立たなかったが、近年その生涯と仕事に光が当てられている人物である。⁽⁹⁾ そのメイは、父親の没後、1910年代に『ウィリアム・モリス著作集』24巻を単独で編集、各巻に充実した序文を執筆した。1936年に出版される2巻本の補遺とともに、モリス研究の基礎文献を編んだという貢献がひとつある。その著作集の編集作業の最中にあった1913年4月にメイはハーディに手紙を書いた。要件は、著作集のある巻の序文でハーディの小説中の古建築物の記述部分を引用するためにその許可を得ようとするものだった。ハーディはそれを快諾する返事を送っている。モリス著作集第18巻（1913年刊）の編者序文に引用されたのは『はるか群衆を離れて』第22章の「羊毛刈りの納屋」（the Shearing Barn）の描写だった。モリスが愛してやまなかつコツツウォルド地方のグレイト・コックスウェルのタイズ・バーン（十分の一税の物納を収めるために建てられた中世の大納屋）のモデルであるとみなして（その見立ては誤解であったと思われるが）、その補強としてメイはハーディの上記のくだりを引用したのだった（xxix–xxx）。生前のモリスは愛読書を家族に読み聞かせる習慣があり、この小説についても1870年代半ばに共有していたようである。メイのハーディへの引用許可の依頼文には、「私たち〔家族は〕みんなの喜ばしく悲劇的な本のなかの大納屋の描写を大いに喜んで読んだのでした」という言葉が見られる。⁽¹⁰⁾ モリスがハーディ宛の手紙で賛美した「舞台背景の美しさ」の一例がこれだったのである。

メイ・モリスとハーディはまた別の機会にも手紙のやり取りがあった。1926年11月27日付のケルムスコット・マナーから出されたハーディ宛の手紙でメイは、「父を記念するヴィレッジ・ホールの建設資金の寄付を募る声明」にハーディにも名を連ねてもらいたいと依頼し、これも快諾を得た。同年12月5日付の手紙でメイはハーディに感謝を述べている。ケルムスコット村のヴィレッジ・ホールはモリスの弟子筋のアーネスト・ジムソンが設

計、建設までに時間がかかったが、モ里斯生誕百周年にあたる 1934 年に無事竣工となった (Faulkner)。

6. おわりに

以上見たように、ハーディは SPAB 発足 4 年後の 1881 年に加入し、以後継続して、主にドーセットにおいて修復＝破壊の危機に瀕した古建築物の保護のために協力を惜しまなかった。彼の反修復運動への参加は若き日の建築家助手の業務をとおして関与した修復への関与に対する反省と悔恨がおそらく大きな動機であったのだろうということ、そして 1906 年に発表した「教会修復の思い出」はそうしたハーディの若き日の建築家修行時代と SPAB への協力の経験が生かされていて、深刻かつユーモラスなエピソードに富み、モ里斯と共有する建築物保護の理念を示している意義深い著作であることを確認した。

本稿の初めのほうで言及したフィッツウィリアム博物館館長のシドニー・コッカレルは、晩年のハーディ(夫妻)と密に連絡を取り合っていたのだったが、手紙のなかでモ里斯の名が時々出てくることが確かめられる。そのなかでハーディのモ里斯評とみなせる記述があるので最後にこれを紹介したい。1917 年 2 月 23 日付のハーディのコッカレル宛書簡にそれは見える。

貴殿がお送りくださった『ウィリアム・モ里斯伝』を私たちはほぼ読み終えるところです。大変楽しんでおります。かくも思いやりのある伝記作者を得られて、幸運な人です。モ里斯はなんと活気にあふれた人物であったことでしょう。私の偽らざる気持ちを申し上げるなら（おそらく貴殿は同意しないでしょうが）、彼は人類全般のためになることを織物作り (weaving) で無駄にしてしまった、ということです。とはいって、彼は自身の性向に無理強いされて、そうせざるを得なかつたということなのでしょう。(Purdy & Millgate, v, 203)

補足するなら、コッカレルから贈呈されてハーディが読んでいた『ウィリアム・モ里斯伝』とは、先にふれた J・W・マッケイル著の「オフィシャル・

バイオグラフィー」である。「かくも思いやりのある伝記作者」(such a sympathetic biographer) という評言にハーディの羨望が窺われるが、ここでなにより目を引くのは、「人類全般のためになることを織物作りで無駄にしてしまった」(he wasted on weaving what meant for mankind at large) と述べているくだりである。これはモ里斯が本業とした装飾芸術の仕事をハーディが評価していないかったことを示すのかもしれない。「人類全般のためになること」とは何であろうか。詩人としてのモ里斯の仕事を指しているということがまず考えられる。詩人モ里斯を高く評価していたハーディからすると、「織物作り」に生涯多くの時間を傾けることが、時間の浪費で惜しまれるということになる。マッケイルの伝記自体が、モ里斯の多方面の活動にバランスよく目を配りながら（ただし社会主義運動へのモ里斯の関りについてはマッケイルの共感は乏しいのだが）モ里斯の詩業についてもっとも熱を込めて評価している。ハーディも関与した SPAB の活動についても十分な叙述がなされている。

上記のコッカレル宛の手紙は文人ハーディらしいモ里斯寸評と言えるが、モ里斯自身はモ里斯商会での本業を文学者としての仕事よりも下位のものとみなしてはおらず、どちらが主でどちらが従というのでなく、他の活動と併せて、互いに補完しあってモ里斯の仕事の総体を作り上げていると考えられる。このあたりにハーディとモ里斯の明確な見解の相違があったように思われる。⁽¹¹⁾ さらに言えば、モ里斯が同時代の小説の熱心な読者でありながら、小説形式自体に批判的で、自分の書いた物語作品を（韻文であれ散文であれ）小説以前のロマンス形式に連なるものとして創作をおこなったこと（とりわけ晩年の「散文ロマンス」と称される作品群にそれが顕著であること）が注目される。こうした文学創作の観点からモ里斯とハーディを比較検討する必要があるのだが、それは筆者にとって今後の課題となる。本稿ではむしろ古建築物保護協会での反修復運動への関与と古建築物保護の理念に注目し、ハーディとモ里斯の交わる地点を考察した。

*本稿は、日本ハーディ協会第66回大会（2023年11月4日、於関東学院大学関内キャンパス）での特別講演「ウィリアム・モリスとトマス・ハーディ 古建築物保護協会への関与をめぐって」に大幅な加除修正をほどこしたものである。発表の機会を与えてくださった会長の金子幸男先生、司会の新妻昭彦先生、事務局長の高橋路子先生ほか、会員のみなさまに感謝申し上げる。

注

- (1) 自伝の旧版ではこのくだりにウィリアム・モリスの名は見られず、本文は“Middleton, the Slade Professor of Fine Art, Cambridge”となっていたが、ハーディの草稿を生かすかたちで校訂されたミルゲイト編の自伝では“Middleton friend of William Morris”とされている。
- (2) ミルゲイトによればハーディは1891年に『テス』の初版本(全3巻)を「[ジョージ・]ダグラス、レイディ・[メアリー・]ジューン [...]、そしてウィリアム・モリスに贈呈した。彼はモリスに会ったことがなかったが、モリスは返信のなかでハーディの初期の小説にある程度親しんでいることを示した」(Millgate 319)。
- (3) ハーディ宛のモリスのこの手紙はノーマン・ケルヴィン編のモリス書簡集に収録されているが(Kelvin, III, 367)、ドーセット博物館トマス・ハーディ・アーカイヴにある手紙原本の画像と照合したところranscriptionに不正確な部分が確認できたので、アーカイブの情報を注記した。具体的に記すと、ケルヴィンが“But there is a great deal of close study of nature, (I mean human save [sic] of that ilk) in the return”としている箇所は、“save”を削除して“But there is a great deal of close study of nature, (I mean human of that ilk) in the return”と読むべきである(“the return”は小文字で記されているがThe Return of the Nativeのこと)。
- (4) たとえばロバート・ギッティングズはコッカレルを「ケンブリッジのフィッツウィリアム博物館の疲れを知らぬ恥知らずな館長」(Gittings 194)と評し、ハーディの草稿をフィッツウィリアム博物館ほかに寄贈させた経緯(194–95)、またハーディの遺志を無視してウェストミンスター・アビーでの葬儀を強引に進めたこと(281–86)を非難口調で記述している。

- (5) シドニー・コッカレルの生涯についてはBluntの伝記を参照。コッカレルが友情に篤く、筆まめであったことは彼がベネディクト会修道女ローレンティア・マックラクレンおよびバーナード・ショーと交わした書簡を原作にしたヒュー・ホワイトモア作の舞台劇*The Best of Friends* (1988) によく描き出されている。名優ジョン・ギルグッドがコッカレルを演じたこの劇は1991年に翻案されてテレビ映画となった。
- (6) 「教会の修復が建築家としてのハーディの主要な仕事だった」(Gilmartin 32)。
- (7) セント・ジュリオット教会の修復以前のディテールのスケッチについてはBeatty編の*The Architectural Note book of Thomas Hardy*を参照。
- (8) ミルゲイトはこの講演テクストを「ハーディ自身が自覚せぬまま演じた役割についての一種の公の告白」と評している(Millgate 56)。
- (9) 2019年11月から2020年3月にかけてロンドン、ウォルサムストウのウィリアム・モリス・ギャラリーにおいて「メイ・モリス——芸術と生活」と題する回顧展が開かれた。これに併せてヴィクトリア・アンド・アルバート博物館から図版・テクストともに充実した研究書『メイ・モリス——アーツ&クラフツ・デザイナー』が刊行された(Mason et al.)。
- (10) メイ・モリスのハーディ宛の手紙の全文は以下のとおり。「拝啓／お願いしたいことがありますお手紙を差し上げます。私の父ウィリアム・モリスが魅かれていたオックスフォードシャーとグロースターシャーについて覚書を書いているところです。そのひとつがファリンドン近郊のリトル〔ママ〕・コックスウェルにある気高い小さな〔ママ〕納屋です。大昔、『ダーバヴィル家のテス』が最初に出されたとき、私たち〔家族は〕みなあの喜ばしく悲劇的な本のなかの大納屋の描写を大いに喜んで読んだのでした。それで、そのくだり（写しを同封いたします）を引用することをご許可いただきたく存じます。問題の覚書は目下私が手掛けております24巻本の父の著作集のうちの一巻への序文にすぎません。その田舎の周辺を幾度となく父と楽しく巡ったことについて書いております。／お早めにお返事をいただけましたら幸甚です。愚かにもお手紙を差し上げるのがかなり遅くなってしまったのですから。／敬具／メイ・モリス」(“Letter from May Morris to Thomas Hardy, 23 April 1915.”) この手紙のソースでは日付のranscriptionが“23 April 1915”となっているが、明らかに年号は

誤記で、“23 April 1913”とすべきである。ハーディの承諾を得て引用が用いられたモリス著作集第22巻は1914年に刊行された。またこの手紙がアップされているウェブサイトには手紙の現物の画像も掲載されていて、“1915”と下一桁の数字を読み違えてしまうのも無理もないが、確かに“1913”であると確認できる。さらに補足すると、この依頼文で引用箇所の出典をメイは『ダーバヴィル家のテス』としているが、モリス著作集で引用したものとおなじであると思われる所以、『はるか群衆を離れて』の誤記であったのだろう。メイの依頼文に対してハーディは1913年4月26日にサフォーク州オールドバラの「ストラフォード・ハウス」から返事を書いている。その文言はこうだ。「ミス・モリス様／私の文章をお使いいただくこと、差し支えありません。いただいた写しをお返します。／自宅から離れておりますので、それでお返事するのがいさか遅くなってしましました。／敬具／トマス・ハーディ」(Purdy & Millgate, vii, 155)。その「いただいた写し」に『テス』ではなく『はるか群衆を離れて』からである旨のハーディによる訂正のメモが記されていたのかもしれないが、これは確かめられない。

(11) ただし、ハーディにしても、職人(とりわけ建築に関わる職人)への敬意の念はモリスに劣らず強く持っていたことは忘れずにおきたい。詩人のジョン・ベッチマンはエッセイ「ハーディと建築」のなかで、「ハーディはノーマン・ショーやフィリップ・ウェップといった彼の時代の進歩的な建築家に共感していただろう。ウィリアム・モリスによって実践されたアーツ・アンド・クラフツ運動も認めていただろう。彼は職人(クラフツマン)たちを称賛していた」と述べ、ハーディの詩篇「年老いた職人」(The Old Workman)の最終連を引いて論を結んでいる。そこ出てくるのは重労働で早くから腰が曲がってしまった初老の石工の話だ。「そうだ、あそこにしっかりと石積みしたのがわたしの誇り。／電も雪もなにものぞ、お日様照ろうと曇ろうと、／どれだけ時が経とうとも、激しい嵐も耐え抜かん、／わたしがいつか地の下に横たわっているあいだにも。」ベッチマンはこの詩連を「ハーディ——あるいは彼の仕事〔作品〕を表すものかもしれない」と示唆している(Betjeman 153)。

参 照 文 献

- “Annual Report.” *Society for the Protection of Ancient Buildings. The Fifth Annual Meeting of the Society.* 1882, pp. 7–20. <https://www.marxists.org/archive/morris/works/1882/spab6.htm>. Accessed 29 June 2024.
- Beatty, Claudio J. P. *Thomas Hardy: Conservation Architect—His Work for the Society for the Protection of Ancient Buildings, with a Variorum Edition of “Memories of Church Restoration”* (1906). Dorset Natural History and Archaeological Society, 1995.
- , editor. *The Architectural Notebook of Thomas Hardy*. The Dorset Natural History and Archaeological Society, 2007.
- Betjeman, Sir John. “Hardy and Architecture.” *The Genius of Thomas Hardy*, edited by Margaret Drabble, Weidenfeld & Nicolson 1976, pp. 150–53.
- Blunt, Wilfrid. *Cockerell*. Knopf, 1964.
- Donovan, Andrea Elizabeth. *William Morris and the Society for the Protection of Ancient Buildings*. Routledge, 2008.
- Faulkner, Peter. “A Visit to Special Collections: Viewing Correspondence between Hardy and the Morrises.” *Hardy and Heritage: Digitising Letters to Thomas Hardy*. University of Exeter. <https://hardyandheritage.exeter.ac.uk/>. Accessed 12 July 2024.
- Gilmartin, Sophie. “Geology, Genealogy and Church Restoration in Hardy’s Writing.” *The Achievement of Thomas Hardy*, edited by Philip Mallett, Palgrave Macmillan, 2000, pp. 22–40.
- Gittings, Robert. *The Older Hardy*. Heinemann, 1978.
- Hardy, Thomas. *Far from the Madding Crowd*, edited by Suzanne B. Falck-Yi. OUP, Kindle. [『はるか群衆を離れて』(トマス・ハーディ全集4) 清水伊津代・風間未起子・松井豊次訳、大阪教育図書、2020年]
- . *A Laodicean: Or the Castle of the De Stancys*, edited by John Schad, Penguin, 1997, Kindle. [『熱のない人』(トマス・ハーディ全集8) 佐野晃訳、大阪教育図書、2012年]
- . “The Levelled Churchyard.” The Thomas Hardy Society, <https://www.hardysociety.org/>

- media/bin/commentaries/1532428889.pdf. Accessed 29 June 2024.
- . *The Life and Work of Thomas Hardy*. Edited by Michael Millgate. Macmillan, 1984.
- 〔『トマス・ハーディの生涯』(トマス・ハーディ全集 16) 井出弘之・清水伊津代・永松京子・並木幸充訳、大阪教育図書、2011 年〕
- . “Memories of Church Restoration.” *Thomas Hardy’s Public Voice: The Essays, Speeches, and Miscellaneous Prose*, edited by Michael Millgate, Clarendon P, 2001, pp. 239–53. [「教会修復の思い出」林和仁訳、『トマス・ハーディ隨想集』上山泰ほか訳、千城、1989 年、90–107 頁]
- Henderson, Philip. *William Morris: His Life, Work and Friends*. Thames & Hudson, 1967.
- [フィリップ・ヘンダースン『ウィリアム・モリス伝』川端康雄ほか訳、晶文社、1990 年]
- Kelvin, Norman, editor. *The Collected Letters of William Morris*. 4 vols., edited by Norman Kelvin, Princeton UP, 1984–96.
- Mackail, J. W. *The Life of William Morris*. 2 vols. Longmans, 1899.
- Mason, Anna, et al. *May Morris: Arts & Crafts Designer*. Thames & Hudson, 2017.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy: A Biography*. Random House, 1982.
- Morris, May. “Letter from May Morris to Thomas Hardy, 23 April 1915.” *Hardy’s Correspondents*. Dorset Museum’s Thomas Hardy Archive,
<https://hardyrespondents.exeter.ac.uk/text.html?id=dhe-hl-h.4398> Accessed 12 July 2024.
- Morris, William. *The Collected Works of William Morris*, edited by May Morris, 24 vols., Longmans, Green, 1910–15.
- . “Letter from William Morris to Thomas Hardy, 15 December 1891.” *Hardy’s Correspondents* Dorset Museum’s Thomas Hardy Archive,
<https://hardyrespondents.exeter.ac.uk/text.html?id=dhe-hl-h.4401>. Accessed 10 July 2024.
- Purdy, Richard Little, and Michael Millgate, editor. *The Collected Letters of Thomas Hardy*. 7 vols. Oxford UP, 1978–88.
- Yildizeli, Fahriye Begum. “W. E. Gladstone and British Policy towards the Ottoman Empire.” Ph.D Thesis, University of Exeter, 2016,
<https://ore.exeter.ac.uk/repository/bitstream/handle/10871/25455/YildizeliF.pdf;jsessionid=944B6290DFB7DDA1F6EEAAA8CAEA3651?sequence=1>. Accessed 10 July 2024.
- ウィリアム・モリス 『小さな芸術』川端康雄訳、月曜社、2022 年。
- 藤田治彦 「ウィリアム・モリスと古建築物保護運動」『ウィリアム・モリスとアーツ＆クラフト』藤田治彦監修、梧桐書院、2004 年、124–27 頁。

[特別寄稿エッセイ]

「全体」へのまなざしの意味 —『トマス・ハーディ全集』全巻完結に寄せて

御 輿 哲也

いやしくも一人の作家を論じようと思うならば、まずはその「全体像をつかまなければならない」とは、よく耳にするアドバイスです。たしかに一つの作品だけをとらえて、そこに見られるメッセージを作家生涯のテーマであるかのように論じたり、さらには、ある場面で使われた、ちょっと面白い表現やイメージを、作家の個性なり人生観と安易に結び付けて語ったりすることが、浅薄で滑稽なひとりよがりに堕しがちであることは、見やすい道理といえるでしょう。

けれども、もちろん例外もあって、たとえば完成された小説作品として遺されたものは、どうやら『嵐が丘』のみであるらしい Emily Brontë や、いくつかの作品の最終的な執筆をめぐって研究者の説が分かれる Shakespeare などについては、問題はもうすこし複雑にならざるをえません。さらに言えば、死後に何らかのかたちで公にされることを意識しながら書かれたとおぼしい書簡や日記は、ある種の「作品」と見なして「全体像」に加えるべきかどうか、これも悩ましいところです。

ことほど左様に、一見単純に見える「全体像」という言葉も、正確に定義づけようとすると、たちまち、視野をさえぎるいくつものハードルに逢着することになります。挙句の果てには、「全体」の把握など、所詮は不可能なことだからと居直って、あえて細部の分析をどこまでも徹底させる方向に、舵をきりかえる批評家もいることでしょう。しかし、扱われる作家自身が、自分を取り巻く人間・自然の環境の「全体」や、「全体」としての社会や歴

史の流れを見据えようとする強い意志をもっている場合は話が別で、ここで扱おうとしている Thomas Hardy は、そうした「全体」への粘り強いこだわりをもった作家の代表格と言えるように思います。

* * *

さて、大阪教育図書から出版が続いている『トマス・ハーディ全集』が、昨年 12 月に、めでたく全巻完結にいたったこと、何はともあれ慶賀のいたりです。この、外国文学をはじめとする人文系出版物の不振のさなかに、わずか 10 年ほどで全 19巻にも及ぶ全集の刊行を成し遂げられたことに対して、心から敬意を表します。ただ、私は Hardy については、短いエッセイを一度書いたことがあるだけで、伝統的な評価の流れや新しい研究動向にもほとんど無知な人間なので、ここでは専門的な視点を離れ、おそらく「全集」という形こそが、いやでも顕在化させうるような Hardy 特有の「全体」へのまなざしがもつ意味について、ささやかな考察を試みてみたいと思います。

たとえば、小さく限定された土地や風土を描きながら、より普遍的な社会「全体」への確かな目配りをも感じさせるという点では、Jane Austen にも Hardy と相通じる要素があるのかもしれません。けれども大きく異なるのは、オースティンの場合、その「小」から「大」へのスケールの変化がとても滑らかで、いささかのぎこちなさも不自然さも感じさせない構成になっているという点です。実例を挙げれば、Mansfield Park の中で、西インド諸島の社会情勢の変化に引きずられるようにして、本来は裕福だった地方地主のプランテーション経営が行き詰まりを迎えているさまは、その息子や娘たちが都会の浮薄な流行に手もなく振り回され、やがては虚しさに捕らわれたまま(恐らく次男の Edmund ひとりを例外として)自分を見失うにいたる様子と、どこまでもきれいに符合しています。

それに対してハーディの場合、「全体」としての社会は、精神面でも物質面でも、遙かに複雑でとらえにくい様相を呈し始めます。たとえば進化論と、

それに続く社会進化論、優生思想につながる遺伝学、さらには女性の権利の拡大を背景にした“new woman”的な新たな登場など——これらの思想や現象は、そうやすやすと「全体」の秩序だった構図のなかに収まる類のものとは思えません。そしてそのあたりの消息ならば、手練れの小説家 Hardy には、言われるまでもなく十分にわかっていたはずです。にもかかわらず彼は、場違いで不調和な要素を大胆に導入することに、なんの躊躇も覚えていないかのように振舞います。*Jude the Obscure* のなかに突然変異的に登場する“Little Father Time”や、「新しい女」のグロテスクな戯画とも映る Sue Bridehead については、すでに多くのていねいな議論がなされているので、ここでは *Tess of the d'Urbervilles* の描写のなかから、更に一層ミクロなレベルでの不調和や不均衡が垣間見られる例を検討したいと思います。

生後間もなく死をむかえ、牧師による洗礼など望めそうもない私生児に、*Tess* は弟たちを集めて、見よう見まねで自ら洗礼のような儀式を敢行してみせます。

The most impressed [of the children] said,
“Be you really going to christen him, Tess?”
The girl-mother replied in a grave affirmative.

まだ少女のような *Tess* は、半信半疑の弟たちの前で、なんとか本物の聖職者のような「莊重さ」を醸し出そうと努めますが、どこか幼さの残る若い女性はやはり不似合いで、アイロニカルなユーモアが漂う場面です。しかし、肝心の「教会」が「私生児」に対してどこまでも否定的な態度をとり続けることを思えば、ここでの *Tess* の仕草は、彼女の世間知らずの子供っぽさを示す一方で、所詮紋切り型の対応しかできない教会への痛烈な皮肉の意味合いも帶びてくるはずです。なるほど *Tess* は無知で無力です。しかし彼女の眼を通してのみ、いわば「弱者」の視点と「強者」の視点の間の、しばしば可視化しがたい「ギャップ」が見えてくることも確かです。

ギャップと言えば、よく問題にされるのが、この作品につけられたサブタ

イトルの“A Pure Woman”が、*Tess* の人生の要約としては、すくなくらず不適切ではないか、という点です。*Tess* が、この物語のなかで背負い込まれることになる役割を列挙してみれば、富裕な邸の「奉公人」から始まって、一時的な「母」から形だけの「妻」へ、やがて父に代わって「実家の大黒柱」となるが、ほどなく「愛人」そして「犯罪者」へと目まぐるしい変化を強いられていて、なるほど、これでは一貫した誠実な自己など求めようもなさそうに見えます。しかし、そうでしょうか？ いくつもの仮面の間を縫うようにして時折り浮かび上がる *Tess* の姿には、なりふり構わず必死で本来の自分を探し求めようとする主人公の、言葉にならない苦悩がじみだしてはいないでしょうか？ いや、そうした派手なスポットライトを浴びることのない *Tess* の一面にも、読者の周到な目配りを要求するところに、「全体」にこだわる作家 Hardy の真骨頂があると言うべきなのでしょう。

* * *

Hardyにおいては、具体的に細々と語られる情景よりも、その背後に暗示されるにとどまる風景の方が、実は重要なのだと喝破してみせているのは、全体に淡々とした口調で語りながら、時に想像以上の深みを覗かせる Virginia Woolf のエッセイです。

If we do not know his men and women in their relations to each other, we know them in their relations to time, death, and fate. If we do not see them in quick agitation against the lights and crowds of cities, we see them against the earth, the storm, and the seasons. We know their attitude towards some of the most tremendous problems that can confront mankind. They take on a more than mortal size in memory... (“The Novels of Thomas Hardy” より）

つまり、ごくありふれた人間関係を描くときでも、Hardy の眼は、あたかも神話を語ろうとするかのように、目に見えるものを注視する一方で、絶えずその背後にあって影響を及ぼし続ける「おおきな得体の知れない力」を意識し

続けようとなります。しかしその結果として読者の手許に残るのは、安定した秩序をもつ「全体」ではなく、どちらに傾くか見当もつかない、不気味に揺動し続ける不安定な「全体」にほかならないということは、忘れてはならないことでしょう。

【付記】本稿は、神戸外大の『外国学研究 59』に所収の拙論「“A Pure Woman”としてのテス」と一部分重複しています。

〔注記〕

このエッセイは、御輿哲也さん（神戸市外国語大学名誉教授）が、トマス・ハーディ全集の全 19 卷（大阪教育図書）が完結・出版されたことに因んで、ご執筆下さったものです。当初の予定では、大阪で「大阪洋書」という、洋書の輸入・販売を行なっている書店が刊行している小雑誌（カタログを兼ねる）*The Browser* に掲載することになっていました。

私は、かねてからお世話になっているこの大阪洋書の社長・川久保清志さんに、拙訳書（共訳）を進呈いたしましたところ、川久保さんは私ども日本ハーディ協会の会員が中心となってハーディの全小説・詩の翻訳を完成されたことに大きな感激を受け、これは日本の英米文学研究界の快挙である、ぜひともこのハーディ全集完結のことをご自分の雑誌 *The Browser* にて紹介したいとおっしゃいました。については、このハーディ全集完結に因んだエッセイをどなたに依頼したらよいだろうかという話になり、御輿哲也さんにお願いしたところ、御輿さんも、個人作家全集の刊行の意義を高く評価され、エッセイ執筆のご快諾をいただいたというわけです。

御輿さんは、このエッセイを 2021 年の秋に脱稿されました。ところが、川久保さんは、この時期に体調を崩されたものですから、*The Browser* は刊行不能となりました。御輿さんは、原稿は出来あがっているから、一応、玉井のもとに送付しておくから、適当に対処してくれとおっしゃって、2022 年 2 月末に送られてきました。拝読したところ、ヴァージニア・ウルフの研究者である御輿さんらしく、テクストの細部と全体との神秘にみちた関係に視線を向けた興味深いご論考でした。ところが、そうこうし

ているうちに、川久保さんが 2022 年 4 月 14 日に逝去され、社長を失った「大阪洋書」は廃業となりました。その上、御輿さんまでも、2024 年 3 月 2 日にご病気で急逝されるという予想もしていない訃報に接し、私は茫然とした次第です。

御輿さんのエッセイは、結局、遺稿となってしまったのですが、この度、私どもの『ハーディ研究』に登載できましたことを、私は心より嬉しく思っております。御輿哲也さんはウルフ『灯台へ』（岩波文庫）の名翻訳者です。川久保清志さんは、林堂一（りんどう はじめ）というペン・ネームをお持ちの現代詩人です（詩集に、『昆虫記』など）。このエッセイは、奇しくも、文学のもつ意味を深く理解されていた二人の文学者のあいだで生まれ、不思議な運命をたどった作品となりました。お二人のご冥福をお祈りいたします。

玉井 瞳

共感と契約 —The Woodlandersにおける進化のアイロニー—

福原俊平

1. 序

トマス・ハーディ(Thomas Hardy)の小説においては、自己犠牲を惜しまない登場人物がしばしば描かれる。例えば、『遙か狂乱の群れを離れて』(*Far from the Madding Crowd*)のゲイブリエル・オーク(Gabriel Oak)や『帰郷』(*The Return of the Native*)のディゴリー・ヴェン(Diggory Venn)は、愛する女性のために献身的に奉仕する。『森林地の人々』(*The Woodlanders*)のジャイルズ・ウィンターボーン(Giles Winterborne)も同じ系統の登場人物である。しかし、オークがハッピー・エンディングを迎えることができるのに対して、ジャイルズの献身は報われない。ヴェンは報われるものの、そのエンディングをハーディが気に入らざり、別の形のエンディングが後に示されたことを考えると、自己犠牲的な献身が報われる結果は読者に迎合するためのもので、作家としての地位が確立された後は、それを拒否するようになったと考えられる。実際、『テス』(*Tess of the d'Urbervilles*)と『ジュード』(*Jude the Obscure*)においても、ハーディは他者への思いやりや自己犠牲が報われない様子が描かれている(福原2014、Fukuhara 2022)。また、ハーディの献身的な登場人物には、共感する能力が高いという特徴がある。¹ 『森林地の人々』においても、ジャイルズの描写が自然と共感する様子がしばしば描かれているが、彼の自己犠牲は報われることなく、最終的には命を落としている。

『森林地の人々』は田舎の小さな村を舞台としているが、悲観主義が影を落としている。この小説は出版の10年以上前に構想が練られ、『緑の木陰』(*Under the Greenwood Tree*)のような牧歌的な物語として着想されたが、執筆段階で『帰郷』のような悲観的な要素が入ってきた(Casagrande 104–108)。ブ

ロットは進化論の枠組みで構成されており、自然選択によってジャイルズが淘汰され、共同体が文明化する流れになっている。しかし、皮肉なことに、この小説では文明化は道徳的な向上を意味しない。ハーディは進化という過程を自然や宇宙の原理として考えていたものの、彼にとっての進化は進歩という垂直的な上昇ではなく、水平的なものであった。とりわけ、道徳という観点では、進化しているはずの人々の方が、道徳的に劣っているという逆転現象がしばしば生じる。

共感と進化論はいずれもハーディ小説にとって重要なテーマであるが、両者の関係性については、十分に掘り下げられているとは言い難い。たしかに、エリシャ・コーン(Elisha Cohn)、ロナルド・モリソン(Ronald Morrison)、キャロライン・サンプター(Caroline Sumpter)などは、とりわけ動物表象に注目しながら、共感と進化を関連付けて論じている。しかし、取り上げられる作品は、『テス』、『ジュード』の後期の二大傑作が中心である。本論ではそれらにつながる前段階の作品として『森林地の人々』を取り上げる。この小説においては、資本主義的な契約概念の流入が、これらの二つの要素を結び付ける鍵となっている。『森林地の人々』における共感と進化論を分析することは、後期の傑作において顕著なハーディの価値観の根底にある意識をより明確に浮かび上がらせるであろう。本論では、『森林地の人々』における共感に基づく関係性と契約による関係性に注目し、村の「進化」の過程で共感が契約に取って代わられる様子を例証しながら、ハーディにおける進化の逆説を分析していく。²

2. 自然との共感と迫り来る変化

この小説において樹木は、実物としても、象徴としても、きわめて大きな意味を持つ。ジョン・サウス(John South)と榆の木のエピソードが非常に印象的であるが、他の村人たちもしばしば植物になぞらえられている。ハーディが進化論から得た重要な教訓の一つは、人間と動物の連続性であり、それが

彼の動物愛護精神の理論的な支えとなった。³ 『森林地の人々』においては、人間は植物とも対等であり、人間と樹木の境界線を消そうという試みが見られる(Cohen, West 39)。ジャイルズとマーティ・サウス(Marty South)は自然と調和した生活をしており、彼らは “[they] had been able to read its hieroglyphs as ordinary writing”⁴ (331) とあるように、ヒエログリフであるはずの森を自由自在に読み解く。彼らは森の些細な兆しを見落とすことなく、森と共に生きる。不思議なことに、ジャイルズの植えた木々はすぐに根付く。他方で、旅回りの職人がジャイルズをまねても、彼のようには上手くいかず、四分の一が枯れてしまうのだという。重要な点は、ジャイルズの能力の根底には自然との共感があり、“there was a sort of sympathy between himself and the fir, oak, or beech that he was operating on” (63) とあるように、人間と植物という壁を越えた共感の回路が見られることである。

村の伝統的な生活は共感による交流に基づく。次の場面では、森林地の人々がジャイルズの心中を察する様子が描かれているが、人間心理の把握は自然を理解することの延長線上にある。

The countryman, who is obliged to judge the time of day from changes in external nature, sees a thousand successive tints and traits in the landscape which are never discerned by him who hears the regular chime of a clock, because they are never in request. In like manner do we use our eyes on our taciturn comrade. The infinitesimal movement of muscle, curve, hair, and wrinkle, which when accompanied by a voice goes unregarded, is watched and translated in the lack of it, till virtually the whole surrounding circle of familiars is charged with the reserved one's moods and meanings. (106)

リトル・ヒントック(Little Hintock)の住人たちは、森を読み解く要領でお互いの心の内を読み解く。つまり、森の住人にとっては、自然も人の感情も本質的には差異はない。そのため、森林地の住人と樹木の間には共感の回路が形成されていると言える。

他方で、エドレッド・フィッツピアーズ(Edred Fitzpiers)も植物の比喩が用

いられるが、そこで強調されるのは彼の外来性である。グレイス・メルベリー(Grace Melbury)がフィッツピアーズのことを “a tropical plant in a hedgerow” (50) と述べているように、植物の比喩で彼の異質性は表現されている。この小説世界では人間と樹木が同列であることを考えると、この表現は単なる比喩ではなく、彼は文字通り別種の存在だということになる。実際、フィツピアーズはグレイスに対して “I do honestly confess to you that I feel as if I belonged to a different species from the people who are working in that yard.” (179) と述べている。このように、フィツピアーズのヒントックへの移住は、奥まった土地に新しい種が到來したことを意味する。

『森林地の人々』はダーウィンの影響が色濃く出た作品として知られている。舞台であるリトル・ヒントックには昔ながらの牧歌的な雰囲気も漂うが、そこに新しい変化が生じる。この小説は進化論の実験となっており、地元の人々が自然に根付いた生活する中に、外部の人物であるフィツピアーズを投げ込み、外部で教育を受けたグレイスが帰郷すると、どのように物事が展開するのかを考察することが、その目的となっている(Millgate 250)。実験結果としては、自然選択による勝者と敗者は明らかである。勝者はフィツピアーズであり、不貞によりグレイスを失いかけるものの、結局は彼女を取り戻す。他方、ジャイルズは善人であるものの、結婚相手としてグレイスを奪われ、家を失い、グレイスへの献身が仇となって命を失う。つまり、外からやってきたフィツピアーズによって、ジャイルズは淘汰されている(Higgins 111)。森林地の人々の典型でもあるジャイルズが生存競争において敗北する事実は、この土地において古い種が新しい種によって取って代わられることが象徴だと言えるだろう。

実際、ヒントックの共同体にも変化の兆しが見られる。外部から新しいものが流入することによって、ヒントックは原始的な村社会から文明的な社会へと「進化」することになる(Nunan 50)。それを象徴的に示すものの一つが、サウスと榆の木の有名なエピソードである。サウスが自分と同じ年齢の榆の木に殺されるという妄想に苦しめられていたが、その木が切り倒されたのを

見て絶命する。切り倒されるこの樹木は、二重の意味で重要である。まず、この木は “it has got human sense, and sprouted up when he was born on purpose to rule him, and keep him as its slave.” (101) とあるように、サウスの分身と言えるため、伝統的な人間と自然の結びつきが、断ち切られることを指していると考えられる。さらに、この小説においては樹木と人間と財産は分かちがたく結びついており、樹木は共同体における連続性を象徴している (West 52-53)。ジャイルズが暮らす家の借家権は “lifehold” であり、ジョン・サウスの生命と結びつけられていたため、サウスの死によって借家権が切れ、ジャイルズは家を失う。伝統的生活を体現するジャイルズは放逐され、その家は地主であるチャーモンド夫人の元へと帰っていき、資本主義的な土地の集約につながる。このように、榆の木の伐採は、共同体の連続性の断絶を暗示しており、伝統的な生活から新しい様態への「進化」が予見される。

ただし、ハーディの進化論理解において重要なのは、勝者が賛美されるわけではないという点である。ジョージ・ルヴィーン (George Levine) によると、『森林地の人々』にはポスト・ダーウィン時代のジレンマが表れており、生物学の時代に愛や道徳をどう理解するべきかという問題が提示されている (201-202)。⁵ ハーディは自然選択による進化という原理は受け入れるもの、それがもたらす道徳への影響については悲観的である。ダーウィンの理論を幅広く市民層へと伝えたのはハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) であり、スペンサー的な進化論においては、進化とは完成へといたる上昇の過程であった。⁶ そのような進歩主義的な進化論とは異なり、『森林地の人々』ではハーディは自然選択による淘汰を進歩ではなく、むしろ道徳的な「悪化」として描いている (Heaney 536)。そして、小説の結末も善良なジャイルズが亡くなり、グレイスはフィツピアーズと再び結ばれるという、当時の道徳観からは離れたものとなっている。パトリシア・インガム (Patricia Ingham) もこの小説では道徳の欠如が社会的な成功につながる一方で、道徳性が進化における障害となっている点を指摘している。ヒニーーはインガムの指摘を参

照しながら、この小説のエンディングは進化論の楽観主義の否定になっていると論じている (536)。社会的成功と道徳性の問題は、『テス』、『ジュード』へと引き継がれることになる。⁷ 次節では、『森林地の人々』において、共感に基づく共同体のあり方と対立するものとして、資本主義的な契約が示されている様子を見ていく。

3. 契約への執着

この小説では、外部からやってきた人々の描写において、契約や取引が強調される。序盤で登場する理髪師は、マーティに髪の毛を売るよう執拗に迫る。ピカピカのソブリン金貨を見せて誘惑する理髪師に対して、マーティは当初 “You go on like the Devil to Dr. Faustus in the penny book.” (13) と述べ、ファウストの悪魔との契約に言及しながら拒否する。最終的には、粘り続ける理髪師に売ることになってしまふが、ファウストの比喩が示唆するように、この取引は悪魔的で不気味なものとして描かれる。悪魔的である理由の一つとしては、彼女の身体の一部を奪う契約だからという点があげられる。彼女は、“But my hair is my own, and I'm going to keep it.” (13) と述べているように、髪という自分の一部を金貨と交換することを嫌がる。ここで注目したいのは、“She [Mrs Charmond] wants my curls to get another lover with” (14) や “She's not going to get him through me.” (14) ということばが示すように、マーティが拒否反応を示すのは、切り離された彼女の髪が商品となり、恋人を獲得するために利用されることである。このように、髪という彼女の身体の一部は、切り離されることによって別の目的を持った商品として流通することになる。なお、マーティの断髪は、彼女の父ジョンが執着する木が切り倒され、そのショックで絶命するエピソードを予兆していることは言うまでもない。この小説において、契約には連続性を断ち切る力があり、身体や土地に根付いたものを引き離すからこそ、悪魔的なものとして目に映る。

このような取引は作品中に繰り返し登場する。フィツピアーズも、ある

村人が“there's good reason for supposing he has sold his soul to the wicked one.”(30)と述べているように、悪魔との契約を連想させる人物である。実際、フィツピアーズはグラマー・オリバー(Grammer Oliver)との間で、彼女の死後にその遺体を10ポンドで譲り受ける契約を結ぶ。その目的は医学的なものではあるが、脳を買い取るという内容は、村人にはいかがわしさを感じさせる。そして、マーティの髪が彼女自身の身体から切り離され、他者の所有物へと変化したように、この契約書はグラマーの脳という臓器を切り離し、フィツピアーズに所有権を移すことを意味する。ここでも、契約は身体という究極的な所有物さえも切断し、奪ってしまう魔力と結びつけられている。

グラマーもその魔力に気づくことになる。健康自慢のグラマーが珍しく病に伏せると、彼女は弱気になり、その契約書を気に病み始める。そして、契約の破棄を求めてフィツピアーズと交渉するようにグレイスに懇願する。重要なのは、契約書が彼女を殺すのではないかとグラマーが妄想する点である。サウスが木への妄執から死に至ったように、“I shall die o' the thought of that paper I signed with my holy cross, as South died of his trouble”(122)と、契約書のことが気になりすぎて死んでしまうのではないかと心配している。結局、グラマーの契約は破棄してもらえるものの、その交渉に向かったグレイスは、フィツピアーズの部屋で顕微鏡をのぞくように促される。グレイスが言われるがままにのぞき込むと、彼女が目にしているのはサウスの脳の断片であることが明かされる。サウスの死によって借家権が切れ、家の所有権がミセス・チャーモンドに戻ったが、それに加えて、彼の脳もまたフィツピアーズの所有物となっている点は意味深長である。

そのようなフィツピアーズにとっては、結婚も契約にすぎない。彼はグレイスと結婚する際に、教会で結婚式を挙げるのではなく、戸籍登録所(a registry office)で結婚式をしようと提案する。彼の主張は戸籍登録所の方が合理的だというものである。結局のところはグレイスの希望により教会で式を挙げることになるが、結婚式に関するやり取りは、人間関係を契約として理解するフィツピアーズの姿勢を示している。フィツピアーズが“Marriage

is a civil contract, and the shorter and simpler it is made the better. People don't go to church when they take a house, or even when they make a will.”(166)と述べているように、彼にとって結婚は契約に過ぎない。このように、フィツピアーズには契約主義が見られ、村の伝統的な人間関係とは相反するものとなっている。

4. 贈与から契約へ

契約主義という点では、ジョージ・メルベリー(George Melbury)の心変わりは共同体の「進化」を表している。メルベリーはジャイルズの亡父との過去の経緯から、グレイスをジャイルズと結婚させると約束したものの、心変わりして婚約を破棄させる。このメルベリーの心わりは、村の伝統的な人間関係から資本主義的な関係性への変化を表している。メルベリーの当初の考えは、“I made it because I did his father a terrible wrong; and it has been a weight on my conscience ever since that time, till this scheme of making amends occurred to me through seeing that Giles liked her.”(18)と述べているように、ジャイルズの父に償うことを目的としていた。良心に基づき、「誤りを正す」ための誓いであり、道徳的な義務感に基づいていた。過去の過ちとは、メルベリーが策略によってジャイルズの父から恋人を奪ったことを指しているが、そのお詫びとして今度は自分が与えることによって、信義を取り戻そうとした。そのため、グレイスは贈与物ということになる。そして、メルベリーがグレイスに寄宿学校での高価な教育を与えたのは、“he determined [...] to give her the best education he could afford, so as to make the gift as valuable a one as it lay in his power to bestow.”(19)とあるように、その贈与物をより価値のあるものにするためであった。このように、グレイスをジャイルズと結婚させる約束は、金銭的な利得からかけ離れたものであり、あえて損をすることを狙うものであった。

ところが、メルベリーはその縁談を反故にする。その理由には、ジャイルズと結婚するとグレイスが社会的に上昇するチャンスを失ってしまうことな

ど、娘を思う親の気持ちとして納得できる面もある。しかし、本論で注目したいのは、過去の誓いを後悔するにつれて、メルベリーのことばには契約主義が入り込んでくる点である。過去の約束を後悔するにつれて、メルベリーは結婚を贈与ではなく、金銭的な契約としてとらえるようになっていく。彼が、“I didn't foresee that, in sending her to boarding-school, and letting her travel, and what not, to make her a good bargain for Giles, I should be really spoiling her for him. Ah, 'tis a thousand pities! But he ought to have her—he ought!”(77)と述べるように、二人の結婚が釣り合うかどうかを“bargain”という観点から考えるようになっている。

そのようなメルベリーの変化を明確に表すのは、グレイスに彼の資産を示す場面であろう。彼はグレイスを呼び出し、彼が所有する証券や債券を見せる。文字通り山のように、“[s]ecurities of various sorts”(86)、“a lot of turnpike bonds”(87)、“Port-Breedy Harbour bonds”(87)などを並べ、次々とそれらを見せて内容を説明していく。さらには小切手帳を提示し、その中身を見るようにグレイスに強いる。小切手帳からは洋服、寄宿費用、学費など、彼女のために費やされた金額が詳らかになる。彼の投資と出費を知ったグレイスは、次のように述べる。

“I, too, cost a good deal, like the horses and waggons and corn!” she said, looking up sorrily.

“I didn't want you to look at those; I merely meant to give you an idea of my investment transactions. But if you do cost as much as they, never mind. You'll yield a better return.”

“Don't think of me like that!” she begged. “A mere chattel.”(88)

この場面でグレイスが感じるのは、彼女という存在の商品化である。馬や荷車や小麦と同様に、彼女には多くの費用がかかっていることが意識させられる。メルベリーは費用のことは気にするなと言いながらも、グレイスへの投資は他よりも良い利潤をもたらす投資だと述べていることからわかるよう

に、グレイスを投資の対象として見る意識が芽生えている。ここにおいて、メルベリーはグレイスの結婚に関して、当初の考えから遠く離れたところで来ている。ジャイルズと結婚させることを考えていた時には、不実を償うための贈与であり、信義則による行為であった。しかし、この場面においては、自分ことを「単なる資産」(a mere chattel)として考えないでほしいという懇願もむなしく、グレイスは商品あるいは資産へと変貌してしまっている。彼女は費用をかけて投資した資産であり、それが将来的に利潤をもたらすことが期待されているのである。このような信義から契約へというメルベリーの変化は、ヒントックという村の「進化」に呼応している。素朴な共同体から文明化した社会に進化することは、人間同士の共感に基づく交流から、資本主義的な契約に基づく人間関係へと変化することだと示されている。

5. ジャイルズと契約の失敗

フィッツピアーズとは対照的に、ジャイルズは契約や金銭的取引において失敗を重ねている。彼は“chivalry”、“purity of his nature”、“self-sacrifice”(314)ということばで形容されるように、純粋で自己犠牲も厭わない人間だとされる。しかし、そのような美德は、“unfortunate in his worldly transactions”(219)とあるように、彼の社会的な成功にはつながらない。むしろ、取引や契約の失敗によって彼は不利益を被る。たとえば、彼はグレイスのそばにいるために競売に参加するが、うわの空であったため、意図せずにメルベリーの意中のものを競り落としてしまい、メルベリー親子の不興を買ってしまう。特に重要な失敗は借家権の契約に関するものである。ジャイルズの母はサウス家の出身であり、彼が暮らす家の借家権はサウス家と紐づけられている。借家権の形態は“lifehold”であり、3代の期間にわたって権利が認められている。しかし、ジョン・サウスが最後の3代目であるため、彼の死によって家は地主であるチャーモンド夫人の元に戻り、ジャイルズは家を失ってしまう。ここで皮肉なのは、契約上の不手際がなければ、ジャイルズは住み続けること

ができたことである。サウスの死の直前、ジャイルズは借家権の証書を見直すと、そこにピン止めされた手紙を見つけ、履行されなかつた特殊な条項があることに気づく。その内容は、“It was to the effect that at any time before the last of the stated lives should drop Mr. John Winterborne, or his representative, should have the privilege of adding his own and his son's life to the life remaining on payment of a merely nominal sum” (98–99) とあるように、サウスが亡くなる前に、ジャイルズの父または代理人が少額の支払いを行うだけで、ジャイルズの父とジャイルズ自身を借家人の名前に付け加えることができるというものである。つまり、これを実行していれば、ジャイルズはサウスの死後も安泰であったにもかかわらず、この重要な手続きはなされていなかった。ただし、ジャイルズがこの手紙を発見した段階ではサウスは存命であったため、まだこの権利は有効であった。しかし、この後すぐに、榆の木を切り倒したことによってサウスが急死してしまい、ジャイルズは家を失う。これはジャイルズというよりは彼の父の不手際であるが、彼の運命には契約の失敗が大きな影を落としている。

このように、ジャイルズは契約の失敗によって苦しめられ、契約好きのフィッツピアーズとは対照的である。しかも、皮肉なことに、榆の木の問題に関して契約を忠実に守ろうとするのはジャイルズである。ジャイルズがサウスの問題について相談を受けた時、サウスは木に圧迫される感覚に悩まされていたため、ジャイルズは枝を切って、圧迫感を減らそうと考える。しかし、実際に作業に入ると、次のこと思い当たり、ジャイルズは手を止める。

He was operating on another person's property to prolong the years of a lease by whose termination that person would considerably benefit. In that aspect of the case he doubted if he ought to go on. On the other hand he was working to save a man's life, and this seemed to empower him to adopt arbitrary measures. (92)

ジャイルズが気づく事実は、木の枝を切りサウスの命を救う行為は、ジャ

イルズの借家権を守る行為でもあるということである。そして、その木の所有者であるチャーモンド夫人は地主でもあるため、借家権の継続／終了のいずれかによって、ジャイルズと彼女の利益は相反する。彼女の財産に無断で手を加えた結果、借家権において彼女の不利に働くことになれば、二重に彼女に不利益を与える一方、彼は借家権の継続という利益を得る。そのため、ジャイルズは道義的な疑問を抱いて手を止めることになる。

それとは対照的に、フィッツピアーズは木の財産権は気にかけない。サウスを医師として診断したフィッツピアーズは、その木を切り倒すことを即座に提案する。ジャイルズが先ほど行おうとしたのは下枝を落とすだけであったが、フィッツピアーズの提案は木そのものを切り倒すことである。木の所有者であるチャーモンド夫人の許可が必要だと指摘するジャイルズに対して、フィッツピアーズは “Oh—never mind whose tree it is—what's a tree beside a life! Cut it down.” (101) と述べる。ジャイルズは食い下がり、土地の慣習として、地主の許可なしには枝一本でも切らないと説明するが、フィッツピアーズは “Then we'll inaugurate a new era forthwith.” (101) と取り合わない。この主張の食い違いには、他者の財産を尊重する意識の違いが表れている。皮肉なことに、契約を重視するフィッツピアーズの方が、契約で大きな失敗をするジャイルズよりも、他者の財産を軽視している。そして、フィッツピアーズの “we'll inaugurate a new era forthwith.” ということばは、彼の発言の意図とは異なるが、実現することになる。自然との共感に基づくヒントックのあり方は失われていくのである。

6. 結論

『森林地の人々』には進化論の影響が見られ、外部から来た人間が小さな村にもたらす変化の波紋が描かれている。外部から新種が到来した結果、自然選択によってジャイルズは敗れ去り、共同体全体も文明化へと向かっていく。これらの新旧の存在は共感と契約の対比によって表現されている。村の

伝統的なあり方は自然との調和であり、人間と森林には共感の回路が通っている。それに対して、フィツツピアーズのような新しい存在は契約を重視する姿勢を村に持ち込んでいる。共同体の変化は、グレイスの結婚をめぐるメルベリーの心変わりに表れている。当初は過去の不実を償うための縁談であったが、メルベリーは次第に結婚を投資として、娘を資産としてみるようになっていく。メルベリーの心変わりは、信義則から金銭契約への変化を表している。他方で、淘汰されてしまう側のジャイルズは、契約において大きな失敗を犯しており、新しい社会のあり方に対応できていない。

ハーディの進化論理解においては、道徳に関する悲観主義が見られる。当時広く流通していたスペンサー的な進化論においては、進化は進歩であり、完成へと至る上昇の過程であった。しかし、ハーディにおいてはそうではなく、進化しているはずの人間の方が、道徳的に劣っていることがあり、フィツツピアーズはその好例である。他方で、ジャイルズは敗北するものの、彼の道徳的な高潔さは明らかである。ハーディにとって、進化とは自然選択による不可避な変化だが、上下の関係ではなく、むしろ水平的なものである。それは、森林地の人々にとって、人間、動物、樹木の間に上下関係がないのと同様である。社会の変化を不可避と認めつつも、人間と自然への水平方向への共感が失われていくことへの悲哀が、この小説におけるアイロニーの根底にあると言える。

*本稿は第1回19世紀イギリス文学合同研究会（於、関東学院大学横浜閑内キャンパス、2023年11月4日）における口頭発表原稿を加筆、修正したものである。

¹ この点については、福原2012を参照。また、Keenはハーディの共感を用いた戦略について体系的に論じている。

² 本論とは観点は異なるが、この小説における共感の問題を扱ったものとしてはAslamiがあり、当時の政治思想における国家観と関連付けて論じている。共感に満ちた英雄的な国家という幻想が流通していたことを指摘しながら、『森林地の人々』は田舎の

人々への共感をはぐくみながらも、最終的にはそれを覆している点に特徴があると論じている。

³ 動物愛護とハーディの関係についてはWest、福原2012を参照。

⁴ *The Woodlanders*からの引用はすべてPenguin版を用い、括弧内にページ番号を記す。

⁵ ただし、Levineは本論とは異なり、悲観主義よりもcomicとしての側面に注目している。

⁶ なお、人類における道徳性の進化については、ダーウィン本人は*The Descent of Man*の第4章で取り上げており、優れた道徳性はその個体には必ずしも有利ではないが、道徳的な個体が多いほど、集団としての生存競争には有益であることを指摘している(157–160)。

⁷ 『テス』と『ジュード』におけるこの問題については、福原2014で詳しく論じている。

Works Cited

- Aslami, Zarena. “The Rise of the State as a Sympathetic Liberal Subject in Hardy’s *The Woodlanders*.” *NOVEL A Forum on Fiction*, vol. 42, no. 1, Mar. 2009, pp. 62–85.
- Casagrande, Peter J. “The Shifted ‘Centre of Altruism’ in *The Woodlanders*: Thomas Hardy’s Third ‘Return of a Native.’” *ELH*, vol. 38, no. 1, 1971, pp. 104–25.
- Cohen, William. “Arborealities: The Tactile Ecology of Hardy’s *Woodlanders*.” *19: Interdisciplinary Studies in the Long Nineteenth Century*, no. 19, Oct. 2014, <https://doi.org/10.16995/ntn.690>.
- Cohn, Elisha. “‘No Insignificant Creature’: Thomas Hardy’s Ethical Turn.” *Nineteenth-Century Literature*, vol. 64, no. 4, 2010, pp. 494–520.
- Darwin, Charles. *The Descent of Man*. Penguin, 2004.
- Fukuhara, Shumpei. “Empathy and Meliorism in *Tess of the D’Urbervilles*.” *The Bulletin of the Thomas Hardy Society of Japan*. no. 45, 2019, pp. 77–88.
- . “The Price of Empathy: Irony of Kindness to Animals in *Jude the Obscure*.” *Kyushu*

- Studies in English Literature* vol. 38, 2022, pp. 25–34.
- Hardy, Thomas. *The Woodlanders*. Penguin, 1998.
- Heaney, John. “Arthur Schopenhauer, Evolution, and Ecology in Thomas Hardy’s *The Woodlanders*.” *Nineteenth-Century Literature*, vol. 71, no. 4, Mar. 2017, pp. 516–45.
- Higgins, Lesley. “Pastoral Meets Melodrama in Thomas Hardy’s *The Woodlanders*.” *Thomas Hardy Journal*, vol. 6, no. 2, June 1990, pp. 111–25.
- Ingham, Patricia. Introduction. *The Woodlanders*, by Thomas Hardy, Penguin, 1998, pp. xvi–xxxiv.
- Keen, Suzanne. *Empathy and the Novel*. Oxford UP, 2007.
- Levine, George. *Darwin the Writer*. Oxford UP, 2011.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy: His Career as a Novelist*. Macmillan, 1994.
- Morrison, Ronald. “Humanity towards Man, Woman, and the Lower Animals: Thomas Hardy’s *Jude the Obscure* and the Victorian Humane Movement.” *Nineteenth Century Studies*, vol. 12, 1998, pp. 64–83.
- Nunan, Rosanna. “The Adolescent Condition in Thomas Hardy’s *The Woodlanders*.” *Literature and Medicine*, vol. 35, no. 1, Mar. 2017, pp. 46–70.
- Sumpter, Caroline. “On Suffering and Sympathy: *Jude the Obscure*, Evolution, and Ethics.” *Victorian Studies*, vol. 53, no. 4, 2011, pp. 665–687.
- West, Anna. “Two Brains and a Tree: Defining the Material Bases for Delusion and Reality in *The Woodlanders*.” *Victorian Network*, vol. 7, no. 1, Oct. 2016, pp. 36–60.
- 福原俊平 「動物との共感——トマス・ハーディ小説における動物愛護思想」『ハーディ研究』第38号（日本ハーディ協会、2012年）、4–30頁。
- . 「利他的な失敗者——*Tess of the D'Urbervilles*と*Jude the Obscure*における道徳と進化論」『ハーディ研究』第40号（日本ハーディ協会、2014年）、50–65頁。

SYNOPSIS OF THE ARTICLES
WRITTEN IN JAPANESE

William Morris and Thomas Hardy:
Their Commitment to the Society for the Protection of
Ancient Buildings

Yasuo Kawabata

William Morris and Thomas Hardy arguably never met in their lifetime, though there is a letter Morris wrote in late 1891 thanking Hardy for sending him the presentation copy of *Tess of the d'Urbervilles*, in which he told Hardy that he had read *Far from the Madding Crowd* and *The Return of the Native* “with much pleasure,” appreciating “a great deal of close study of [human] nature” in the latter novel, “besides the beauty of the mise en scène.” Hardy, in his turn, upon reading J. W. Mackail’s biography of Morris, wrote to Sydney Cockerell in 1917, expressing his admiration for Morris’s “strenuous character.”

My paper focuses on Hardy’s contributions to the Society for the Protection of the Ancient Buildings (SPAB), founded in 1877 by Morris in response to the widespread practice of “restoration” done by Victorian Gothic Revival architects, led by Gilbert Scott, which had devastating consequences. While working for some architects, including John Hicks, young Hardy was involved in the “restoration” works. In his autobiography, he admits that he was passively involved in destroying or altering many beautiful ancient, Gothic, and particularly Jacobean and Georgian works beyond identification—“a matter for his deep regret in later years.” It is certain that the “regret” caused him to become a member of the SPAB in 1881. He

exerted considerable effort for the society, beginning with Wimborne Minster in 1882, investigating ongoing or proposed restorations, corresponding with the Society’s Secretary about the buildings’ condition, and providing guidance on various cases. It is hardly surprising that the cases he was involved in focused mainly on buildings in his Dorset neighborhood.

One of Hardy’s most noteworthy contributions to the SPAB is the paper “Memories of Church Restoration,” which Colonel Eustace Balfour read on his behalf at the annual meeting of the SPAB in 1906. The paper, punctuated with strange and amusing episodes about restoration, most of which he experienced at first hand, asserts that protecting ancient buildings as a social duty is “preserving memories, history, fellowships, fraternities,” demonstrating how his views on ancient buildings align with those of Morris.

Empathy and Contract:
Irony of Evolution in *The Woodlanders*

Shumpei Fukuhara

Thomas Hardy’s *The Woodlanders*—which depicts changes brought about by outsiders to a small village—develops its narrative in the framework of evolutionary theory. Through the process of natural selection, Giles Winterborne, who embodies the traditional way of life in the village, is defeated by Edred Fitzpiers, a newcomer, and the community shows signs of civilization. The conflict between the old and the new is represented by the contrast between empathy and contract. While the woodlanders are characterized by their empathy towards nature and other villagers, the outsiders bring a contract-oriented attitude to the village. The changing nature of

the community is reflected in George Melbury's shifting attitude towards his daughter's marriage. Initially, the marriage was an arrangement to atone for his past wrongdoing, but Melbury comes to see her marriage as an investment. Meanwhile, Giles, who makes mistakes regarding contracts, fails to cope with the new trend.

The novel elucidates Hardy's pessimism about the place of morality in evolution. In the Herbert Spencerian theory of evolution, which was widely circulated at the time, evolution meant an upward process leading to perfection. However, this is not the case with Hardy. While supposedly evolved humans such as Fitzpiers are morally inferior, Giles—whose moral integrity is evident—is defeated. Although accepting evolution as inevitable, Hardy regards it not as vertical but as horizontal, in much the same way that the woodlanders do not recognize hierarchical order among humans, animals, and trees. While Hardy acknowledges the inevitability of social change, sadness at the loss of horizontal empathy between man and nature is expressed through irony.

[書評]

Richard Franklin, *Thomas Hardy and Religion: Theological Themes in Tess of the d'Urbervilles and Jude the Obscure* (Eastbourne, East Sussex: Sussex Academic Press, 2021)
xii+190pp. ISBN: 978-1-78976-139-9

栗野修司
Shuji AWANO

トマス・ハーディとキリスト教を論じることは、今も昔も研究者にとってはチャレンジングである。ハーディ没後、彼をウェストミンスター寺院のPoet's Cornerに葬るかどうか／葬られる資格があるかどうかが論議されたのは、「キリスト教徒」ハーディの立ち位置が非常に曖昧であったからだ。若い頃に国教会の牧師を志していた（「国教会の正統的信徒だった」[1908年の手紙]）が、それを放棄し、やがて、国教会の「ドグマ」を公然と批判し始め、終生それは変わらなかった。（ハーディと頻繁に私信を交わしたエドモンド・ゴッスのような）不可知論者と呼ばれることもあり、「村の無神論者」（ハーディが崇拝した詩人シェリーは無神論者）と揶揄されることもあり、自分では churchy と認識していたハーディのキリスト教観／キリスト教徒としての立ち位置は、これまで様々に論じられてきて、焦点が定まらない。Richard Franklin, *Thomas Hardy and Religion* はそれに一石を投じる論考である。

著者のリチャード・フランクリンは 29 年間ウェイマスで英國国教会の司祭を務め、現在はハーディ協会の会長。ハーディとキリスト教を論じるに彼ほど適任な人は他にいまい。そしてこの経験が論考に特徴的な意味を与えている。副題の Theological Themes in *Tess of the d'Urbervilles and Jude the Obscure* が示すように、フランクリンは、『テス』と『ジュード』をハーディの「二

大宗教小説」とみなし、そこに描かれるハーディのキリスト教観を吟味すれば彼の作品はさらによく理解できると言う。ハーディは無神論者でも不可知論者でもない。彼はキリスト教会の偽善や欠点や教義の一部を批判することはあっても、キリスト教そのものを批判してはいない。このように「序」で、フランクリンはハーディのアポロジストとしての自分の立場を明確にする。これがフランクリンの他の研究者と異なる点である。

非キリスト教徒やイギリス以外のキリスト教徒を読者に想定していることがこの著作に重要性を与えている。それは「序」に十数ページを割いて、18世紀以降のイギリスのキリスト教の歴史を概観しながら、エヴァンジェリカリズム（低教会）とアングロ・カソリシズム（オックスフォード運動、ピュージー主義）がどのように国教会を「侵食」したかを解説している点に見られる。（実際、フランクリンの言うように、初期のウィルバーフォースに代表される、ヒューマニズムをたいまつとして高く掲げ、社会正義の実践や社会改良に積極的に関わったエヴァンジェリカリズムから狭量かつ教条的なエヴァンジェリカリズムへの変遷を知らないと、『テス』のクレア牧師は「古い時代のエヴァンジェリカルの最後のひとり」と登場人物に評させるハーディの真意を見抜くことはできないだろう。「メソディズムがイギリスを（革命から）救い、エヴァンジェリカリズムが国教会を救った」と言われるが、瀕死の状態にあった国教会を立て直すのに[国教内に踏みとどまつた]エヴァンジェリカルは大きな役割を果たした。1830 年代のエヴァンジェリカリズムの最盛期に生まれ育った人たちにはエヴァンジェリカリズムの影響を受けた人が少なくない。クレア牧師はそういう人物として描かれている。）

ハーディはキリスト教を批判しているが、それはキリスト教徒たちが陥りやすい過ちを読者に知らしめたいという意図からだ、とフランクリンは言う。キリスト教であれユダヤ教であれ、またイスラム教であれ、どれも現世を生きることの意味を重要視し、かつ来世の存在も肯定しているが、ハーディの悲觀主義はそのどちらをも否定しているように多くの読者は思うだろう。そういう印象が読者をハーディから遠ざける。ハーディは当初エヴァンジェリ

カルだったから、その影響が後の作品に頻繁に見られる「生を否定」する悲観主義的な見方につながったのだ。(フランクリンはハーディの伝記的事実については、ミルゲイトやギティングズなどの先行研究に依拠しながらも、時折独自の解釈を提示するが、これがその一つ。) ハーディは読者にそれまで神学者などが問うてきたのと同じ問い合わせ——信仰とその実践について考えようという問い合わせ——を彼の登場人物を介しておこなったのだ。この問い合わせは悲観主義とは矛盾するものではないし、むしろ超越的であるという点で宗教的な人生観と親和性を持つ。ここに高教会の牧師にしてハーディ協会会長、リチャード・フランクリンのハーディ観が明らかにされている。「ハーディの宗教に対する深い関心と感情的共感が、『テス』と『ジュード』において、他のどの小説よりも前面に押し出されているのは、おそらく大きな皮肉である。その後、教会や宗教的信仰に対する彼の態度が軟化しているのは、これらの作品を書くことで、何か得るものがあったのかもしれない。これらの作品を書いたことが、彼に浄化作用のようなものをもたらしたのかもしれない。」フランクリンの描くハーディ像は正統的キリスト教徒のそれである。

第一章は「ハーディの宗教思想の展開」。この章でフランクリンは先行研究を精査して、ハーディの人格形成期のドーセットではハイ・チャーチからロー・チャーチ、非国教会派など様々なキリスト教宗派が活動していて、ハーディはその影響を受けたことを論証する。特にエヴァンジェリカリズムは、贖われた者に祝福された復活の人生を約束することによって生の無常の問題を解決した。その一方で、ハーディのように死後の世界を信じることができない人々には人生の儂さと苦しみの問題は解決されないまま残った。ハーディの思想形成期のエヴァンジェリカル的な復活思想は後のハーディの人生哲学に大きな影響を与えた。フランクリンはハーディの作品中の登場人物にエヴァンジェリカリズムの「残滓」を見いだそうとする。宗教教義にまで踏み込んで、ハーディの思想／人格形成の軌跡をたどるのは類書に見られぬ優れた特徴である。司教の面目躍如と言つてよい。

フランクリンはポスト構造主義文学理論に基づくテクスト分析ではなく、伝記的事実を多く用いて作品の解釈をおこなっている。例えば、若きハーディの「師」であり友でもあったホラス・モウル、妻エマ、フローレンス・ヘニカー(1893年5月19日にダブリンで出会って、ハーディは文字通り「一目惚れ」をした。Pamela Dalziel (ed.), *Thomas Hardy: The Excluded and Collaborative Stories* [Clarendon P, 1992] pp. 260–88に詳しい。)との関わりがプロットや登場人物の性格に反映していると考えるのである。確かに、文学テクストに作者の様々な人との邂逅とその影響が織り込まれることは否定できない。しかし、作家の想像力の源泉はその範囲に限定されるものではない。何よりも、伝記的事実は長い人生の断片に過ぎず、その叙述が正確かどうかの判断も難しい。例えば、ハーディの『生涯』や書簡から我々が得ることのできるホラス・モウル像はあまりにも希薄で、十分に認識できる姿をなさないことを考えるならば、モウルの人となりがエンジェル・クレアの人物造形に反映したというフランクリンの見解の当否は我々には検証不可能である。だが、そのような批判をものともしない「情熱」がリチャード・フランクリンにはある。それは、国教会の牧師がエヴァンジェリカリズムとアングロ・カソリシズムに向ける批判から生まれる。そしてそれは他のどんなハーディの研究書にも見られない種類のものだ。

『テス』を十分に理解するためには、そこに描かれたエヴァンジェリカリズムを理解しなければならないと主張するフランクリンは、第二章と第三章でハーディが『テス』で展開するエヴァンジェリカリズム批判を彼の宗教体験に結びつける——フランクリンによれば、ハーディは多くの作品でエヴァンジェリカリズムを批判的に描いているが、その理由は彼が若い頃エヴァンジェリカルであったこと、そしてその信仰を後に失ったことがあるとする。

この章でフランクリンは日本のハーディ研究者がまず目にすることのない貴重な資料も紹介している。その一つが James Townsend, “Grace in the Arts: Thomas Hardy: The Tragedy of a Life without Christ” <https://faithalone.org/journal-articles/the-tragedy-of-a-life-without-christ/>。このエヴァン

ジェリカリズム広報誌に載った論文で、著者タウンゼンドはハーディの全ての詩と主要9小説中に聖書への言及が1728箇所あると書いている。副題「キリストなき人生の悲劇」を見れば一目瞭然、ハーディを蛇蝎（悪魔）のように嫌悪しながら、その主要作品を通読し、聖書への言及をひとつひとつ数え上げるという、そのエヴァンジェリカルの使命感というか、執念というか、憎しみから生まれるエネルギーのようなものに賞賛の気持ちさえ抱きそうになる。このエッセイは「不可知論者トマス・ハーディは神なき人生を生きた悲劇の例」という結論で終わっている。エヴァンジェリカルのハーディ観が一文で表現されていて、分かり易い。『ジュード』を暖炉に投げ捨てて文字通り焚書してしまったあの主教の心境はかくやと思われて、得るところ誠に多い小論文である。

エヴァンジェリカリズムを俎上に載せたフランクリンは、第四章ではアングロ・カソリシズムを取り上げて、これを批判する。まず『ジュード』の生成のプロセスを明らかにすべく、若き日のハーディが接したアングロ・カソリシズムを丁寧に拾い上げる。アングロ・カソリシズムは1838年の造語で、英國国教内にあって、カソリックの立場を再確認しその伝統（聖餐式やミサなど）も引き継ぐ集団を指す。それはオックスフォード運動として顕在化し、ニューマンがカソリックに改宗した後は、エドワード B. ピュージーが指導的な役割を果たした。（アングロ・カソリックとは、一言で言えば、ニューマンの後を追うことのできなかつた人たち——ニューマンのカソリシズムへの改宗はルビコン川を渡るようなもの——ルビコンを渡る勇気を持てなかつた人たちである。）この章でフランクリンはハーディの作品には多くのアングロ・カソリックが登場することを指摘している。例えば、『緑樹の陰で』のメイボールド牧師、『搭上の二人』のヘルムズデール司教、『テス』のトリンガム牧師やマーシー・チャント。その延長上に『ジュード』があり、そのテクストはハーディの人生や個人的な経験、興味（特にネオ・ゴシック建築、儀式、教会音楽）、信条、人間関係の糸で織られている。そしてその多くはアングロ・カソリシズムと関わっている。

「『ジュード』というテクスト中のアングロ・カソリシズム」というタイトルが示すように、第五章では『ジュード』の中にアングロ・カソリシズムがどのように表現されているかを詳細に検討する。その中で興味深いのが、召命（vocation）という概念はアングロ・カソリシズムの特徴であるという指摘。19世紀イギリスで、召命は、オックスフォード運動とそれに続くアングロ・カソリシズムの台頭の結果、聖職と修道生活への召命という概念に昇華し、英國国教会の中で復活を遂げたとフランクリンは言う。トラクタリアンは、聖職には神聖な起源と立場があることを強調した。これによって多くの聖職者や信徒が国教会の聖職（者）の性格を再評価し、聖職者は、神によって召され、使徒の後継者として任命された者と見なされるようになった（聖職者の特権化）。『ジュード』の冒頭のフィロットソンの言葉は、この召命なのだという。これは聖職者ならではの解釈だろう。

『ジュード』を読むときに、そこに描かれるアングロ・カソリシズムの諸要素（例えば、秘蹟）を無視することはできない。ジュードは根っからのアングロ・カソリックであり、その宗教的信念は、皮肉なことに彼が信奉していたアングロ・カソリシズムの教義そのものによって徐々に破壊されていく。この小説のテーマは社会の慣習や法律、風習に対する批判だが、アングロ・カソリシズムの問題点も暴かれる。こういう指摘もフランクリン独自のものだ。

『テス』と『ジュード』を論じた4つの章を読んで、ハーディの登場人物の性格形成に認められる宗教の影響をフランクリンは過大に評価しているのではないか、と感じる読者もいるだろう。実際、彼の作り出した人物像はどれも複雑である。その多面性を無視して、宗教が人となりの最重要要素とみなすことには慎重でなければならない。テクスト分析がほとんどないこと、「たぶん」、「恐らく」などの頻繁な使用で特徴付けられる推論など、ポスト構造主義文学理論に基づく解釈行為に慣れた読者には違和感があるかもしれない。そのような特徴や欠点があっても、リチャード・フランクリンのハーディのテクストを宗教の文脈に置いて読み直そうという試みは評価されるべ

きだろう。

19世紀イギリスのキリスト教についてもっとよく知りたいという人には道案内として、Timothy Larsen, *A People of One Book: The Bible and the Victorians* (Oxford UP, 2011)を薦めたい。アングロ・カソリシズムから始めて、10の宗派(無神論者を含む)の特徴を分かり易く解説している。例えば、アングロ・カソリシズムの最初の一節——「F. B. ピュージーがどんなに嫌われていたかに留意することは重要である」。あるいは7章「クエーカー教徒」の冒頭——「今イギリスで、19世紀のクエーカー教徒を誰か知っていますか」という質問に対して、刑務所改革者のエリザベス・フライという答えに、「5ポンド賭けてもよい」という具合。(この研究書発行時の5ポンド札裏面にはフライの肖像画が載っていた。)賭け事の好き嫌いにかかわらず、19世紀イギリスのキリスト教に興味を持つひとには読んで楽しく有用でもある。

日本ハーディ協会会則

1. 本会は日本ハーディ協会 (The Thomas Hardy Society of Japan) と称する。
2. 本会はトマス・ハーディ研究の促進、内外の研究者相互の連絡をはかることを目的とする。
3. 本会の所在地を、大阪府東大阪市小若江 3-4-1 近畿大学経営学部 高橋路子研究室内に置く。
4. 本会に次の役員をおく。
(1) 会長 1 名 (2) 顧問 若干名 (3) 幹事 (各種委員長及び会計)
若干名 (4) 運営委員 (5) 会計監査
5. 会長および顧問は運営委員会が選出し、総会の承認を受ける。運営委員は会員の意志に基づいて選出されるものとする。運営委員会は実務執行上の幹事を互選し、総会の承認を受ける。会長および顧問は職上運営委員となる。役員の任期は 2 年とし、再任は妨げない。ただし、顧問の任期は定めない。
6. 幹事は会長を助けて会務を行う。
7. 本会は次の事業を行う。
(1) 毎年 1 回大会の開催 (2) 研究発表会・講演会の開催 (3) 研究業績の刊行 (4) 会誌・会報の発行
8. 本会の経費は会費その他の収入で支弁する。
9. 本会の会費は年額 4000 円 (学生は 1000 円) とし、維持会費は一口につき 1000 円とする。
10. 本会に入会を希望する者は申込書に会費をそえて申し込まなければならぬ。
11. 本会は支部を置くことができる。その運営は本会事務局に連絡しなければならない。
12. 本会則の改変は運営委員会の議を経て総会の決定による。

附則 1. 本会の会員は会誌、会報の配布を受ける。

(2023 年 6 月改正)

編集委員

福原 俊平 糸多 郁子
金子 幸男 風間 末起子
宮崎 隆義 上原 早苗 (委員長)

ハーディ研究

日本ハーディ協会会報第 50 号

発行者 金子 幸男

印刷所 中央大学生活協同組合

2024 年 9 月 10 日 印刷

2024 年 9 月 15 日 発行

日本ハーディ協会

〒 577-8502 東大阪市小若江 3-4-1

近畿大学経営学部 高橋路子研究室内